"Rewrite" epilogue (another)

one more kiss, one more love. / はなたばを、君に

「神戸小鳥の旅路」目次

世界の終りから　「終末は巡る黄金の秋」所収　P．5
"Knockin' on Heaven's Door"　「終末は巡る黄金の秋」所収
"G"線上のアリア　「終末は巡る黄金の秋」所収　P．23
たったひとつの冴えたやりかた　P．27
(intermission)　終わる世界　P．107
one more kiss, one more love.　「終末は巡る黄金の秋」所収
Love is (not) destructive.　P．131
彼方の待ち人　P．147
はなたばを、君に　P．155
everything you've ever dreamed　「神戸小鳥の旅路」所収
It's a Beautiful World
You are the earth, I am your moon.

"Knockin' on Heaven's Door"

小鳥のアトリエを探して森を彷徨う鳳ちはやの目の前に、彼女は倒れていた。
まともな人間なら、確実に死んでいる傷だ。それは取りも直さず、目の前で倒れている反りの合わない同級生――此花ルチアが、まともな人間なんかではないことを端的に示していた。
（――私も同じか）
どうしよう、助けなくちゃ、その焦燥の裏側で、鳳ちはやは、ほんの一瞬だけ、そんなことを思った。

@　　@　　@

そして、小鳥のアトリエに集ったオカルト研究会の誰もが、此花ルチアは死んだ、そう思ったとき。
「『鍵』……！？」
此花ルチアの前に力なく座り込んだ神戸小鳥の前に、それは差し出されていた。『鍵』の異次元の色彩のリボン。その先端が、「これを使え」とでも言うかのように――。

@　　@　　@

翌朝にはもう、此花ルチアの傷は、すっかり治ってしまっていた。
いくら次元圧縮した人工生体基盤を擁するガーディアンの生体兵器といえども、常識では考えられないことだった。そして。
「わかった、私にも手伝わせてくれ」
何の迷いもなく、此花ルチアはそう言った。
「え……いいのか？」
「何がだ」
そう問い返されて、天王寺瑚太朗は言葉を失った。
「だって、その……ガーディアンは、鍵を……」
「殺す、と云いたいのか？」
こくりと、天王寺瑚太朗は頷く。
「勘違いしないでくれ。ガーディアンは意味もなく何かを害するような組織ではないんだ。

たとえそれが、人類を滅ぼしかねない力を持っている存在であったとしても……」

ちらり、と此花ルチアは鳳ちはやに視線をやった。

「それを利用して、人類を滅ぼそうとする組織の人間であってもな」

@　　@　　@

秋も深まって、夜の風が吹き抜ければ、寒い。

風呂上がりだが、油断していれば湯冷めする。

鳳ちはやは、ほんの少しだけ迷ってから、ストールを羽織った。

小鳥の森の結界の中でも、どうやら虫たちは特に不自由なく生活をしているようだ。

りり……りりり……と辺り一面から声がした。

その草むらを一筋走る獣道に、鳳ちはやは足を踏み出した。

ざり、とサンダルと小石が擦れる音がする。

しっかりとした高い木の太い枝に、その手に超振動ブレードを提げて、此花ルチアは優雅

に腰を下ろしていた。哨戒なのだろう。
その身体に内蔵された人工生体基盤が、如何なる能力を秘めているのか、鳳ちはやはまだ知らない。単独行動する戦闘機能は、力の全てを晒さない。己の「包帯」だってそうだ。

「此花さん、もう大丈夫なんですか」
「ああ、すっかり元気だ。心配をかけたな」
「ひどい傷でしたから」
「そうか、鳳さんが私を運んでくれたんだったな」
にこり、と此花ルチアは微笑んだ。
鳳ちはやの心臓が、その笑顔に、どくりと跳ねた。

夜空は晴れ渡っていて、その向こうにぽっかりと月が浮かんでいる。
月の光が、地平線の山影まで続いている森を、照らしていた。
「……改めて、感謝する。ありがとう」
「どういたしまして」

どうしても、言葉が素っ気なくなった。
「まあ……」
今度は、苦笑いだった。
「仲良くしよう、とは言わないけどな」
言うと、ちらりと眼下のアトリエを見た。
そこには、主たる神戸小鳥と、天王寺瑚太朗、そしてあの「鍵」が眠っているはずだった。
「一旦休戦は本当だ。それは信じて欲しい」
「いったん、ですか？」
「そういう意味じゃない……」
此花ルチアは困ったような声を出した。
「また敵になるかも知れないとか、そういうことじゃない。心配なら、ちゃんと言うけどな。鳳さん、ああ、神戸さんも、会長殿もそうだが、みんな、仲間だ。敵じゃない」
「ずっと、ですか？」
「ああ」
天王寺瑚太朗についての言及がないのは、鳳ちはやは気にしないことにした。単に眼中に

ないだけだろう。
「此花さん」
「なんだ？」
休戦の承諾だと思ったのだろう。此花ルチアは、穏やかにそう問い返してくれた。
鳳ちはやは、言った。
「あなたは、誰ですか？」

@　　@　　@

小鳥のアトリエに奇妙に非対称な緊張が走っていた。
「委員長、一体……」
天王寺瑚太朗の言葉が困惑のまま宙に消え、此花ルチアが力なく首を振った。
「私にも、何が何だか分からない。ただ、鳳さんが……」
鳳ちはやは、いつもとほとんど変わらない不機嫌そうな顔で、いつもとほとんど変わらな

い不機嫌そうな距離を取って、此花ルチアの横に立っていた。そして、いつもとほとんど変わらない不機嫌そうな――しかし、いつもと違う致命的にフラットな声で、言った。
「此花さん、あなたは、誰ですか？」
「……こればかりなんだ。さっきから」
「ルチア、心当たりはあるのか」と静流が問うが、
「すまないが」ちらり、とちはやに視線をやり「……全くない」
また、沈黙が流れた。
アトリエの隅の『鍵』の異次元の色彩のリボンが、ゆらゆらと揺れているばかりだ。
「ちはや、何かあるのはわかった。だけど、もう少し説明できないのか」
「……」
「話をしないと、誤解も解けな……」
「誤解じゃありません」
ちはやが遮り、言い切った。議論の余地がない。
「悪かった、誤解じゃなくて……委員長がその……」ルチアと瑚太朗の視線が交差した。
「――誰なのか、教えてくれないか」

「……此花さんは此花さんですよ」
「それじゃあ」
「でも……だって、おかしいと思わないんですか」
「何が」
「此花さんが、こんなに簡単に……」
一瞬言いよどみ――しかし、鳳ちはやは、此花ルチアをまっすぐに見据えて、言い切った。
「自分の正しさを捨ててしまうなんて――そんな都合のいいことが、あるはずないじゃないですか」
「な……！？」
鳳ちはやの言葉に、此花ルチアは、瞬時に頭に血が上ったようだった――が、次の瞬間、紅潮した顔がすっと青ざめた。その言葉の意味を理解して、納得してしまったのだ。
その緊張の外側で、びくり、と小鳥が肩を震わせた――のに気づいたのは、しかし、小鳥のほかに、ただ一人、鳳ちはやだけだった。

@　@　@

なにかがおかしい――それが一体何なのか、何故なのか、どうしたらいいのか、それはまるで分からないが、しかし、確実に。

それが、誰もの共通認識だった。

此花ルチア自身も、己の『転向』が、普通ではないことを、悟ってしまってした。

だって、此花ルチアは、そのような融通の利く人間ではない。

頭で考えれば、今すぐあの『鍵』を始末してしまうべきだ――可能かどうかは別として、そう試みるべきだ。だが、全く不可解なことに、どうしてもそういう気持ちになれない。そもそも、そのような「気持ち」で判断するようなことが、ガーディアンの特殊戦力たる此花ルチアとしては、あり得ないことなのではないか。

そんなルチアを、中津静流が真顔で心配をした。その様子を見て、鳳ちはやは、自分が謀られているわけではない、ことだけは、ようやく理解した。

故にこそ、できることは何もないことになる。

とにかく、その場は散会となった。

夜も遅かったから、仕方がなかったのだ。

しかし――

――その数時間後。

@　@　@

@　@

突如突き上げる振動が、瞬時に小鳥のアトリエを粉砕し、一拍おいて、バラバラになって吹っ飛んだ木材や家具が、地面に降り注ぐ激しい音がした。

そして、あとに残った瓦礫の山を吹き飛ばし、そこから現れた包帯の繭のごときもの――

「――まったく無粋ですね、お嬢様ともあろうものが」

繭がするするとほどけ、中から現れたのは、瑚太朗、小鳥、静流、ルチア、ちはや、そして、それらを片手で軽々と抱えた――

「――鳳咲夜ともあろうものが、この程度、の襲撃を防げないわけもないでしょう？」

艶然と微笑んだのは、蛸と蜘蛛の合いの子の如き巨大な怪物、クリボイログの背に乗ったガイアの首領、千里朱音だった。

「朱音さんッ！」

鳳咲夜の肩の上で、鳳ちはやが叫んだ。

「『鍵』の気配がない――ちはや。『鍵』はどこかしら？」

「知りませんッ！」

@　@　@

戦況は、拮抗している――かに見えた。

@　@　@

己の致命的に暴力的に破壊的な一撃が、クリボイログを屠った――と、鳳咲夜は思ったかも知れない。それが徒になった。

「――！！」

鳳咲夜の目に、にたり、と嗤う千里朱音が映った。

しまった、と思うのと、恐らくは同時だっただろう。

ジャキン――！！

鋭く巨大なものが激しく噛み合わされる音がした。

巨大な鋏が、そのかたちをした植物――であろうものが、突如出現していた。

地上から歪に突き出したその刃は、既に噛み合わされていた。

鳳咲夜と鳳ちはやを繋ぐ見えないアウロラの糸を、真っ二つにするように――

瞬時に、鳳ちはやは魔術的な支えを失った。必然の帰結として、空中から真っ逆さまに落下した鳳ちはやは、無惨に地面に墜落――

死を覚悟した鳳ちはやの身体が地面に触れる寸前――紫の暴風がそれを浚った。

「此花さん！？」

「舌を噛むぞ！」

@　@　@

ガイアとドルイドの戦闘は――いや、それは結局、戦闘と言えるような種類のものでもなかった。それは、一方的な、完膚なきまでの蹂躙だった。鳳咲夜、ガイア最強の魔物のみならず、『鍵』の本質をも奪われた。神戸小鳥の手にある『鍵』はすでに、完全な抜け殻だった。

中津静流は、ガーディアン極東教区・日本支部とコンタクトしていた。カイチョーを止めることができるのは、それでもガーディアンだけだ。手加減は難しい。いざとなれば、カイチョーを手にかけることもある。いや、そのチャンスがあるなら、やるのだ。中津静流は腹を括った。腹を括らせるのに、己の薬剤を少なからずつぎ込んだとしても、それをする程度の覚悟はあった。

一方で神戸小鳥は、完全に生気を失って、ベッドに横たわっていた。『鍵』を奪われた。最早神戸小鳥に為すべきことは、この世界にただのひとつも残っていなかった。少なくとも、そう思うことができた。それはある意味で、幸せなことかも知れない――と、天王寺瑚太朗は思った。しかし。

天王寺瑚太朗は、それでも、状況を冷静に観察しようと、己の心を砕いていた。神戸小鳥の、これが終着点なのか？　これがエンディングだとでも言うのか？　そんなことを、天王

寺瑚太朗は認められなかった。彼女が文字通りに命を賭けて、命を削って紡いできた道の先に、もっとマシな、願わくは幸せな場所がないのか。いや、なくてはならない。そのために、天王寺瑚太朗は己に冷静さを強いた。小鳥が倒れた今、俺にそれができなければ、誰ができるというのだ。

そんなことばかりを考えていたから、此花ルチアの『異変』のことを口にするものは、誰もいなかった。誰もがそれを忘れてしまった――ように、見えただろう。

@　　@　　@

「小鳥」

「……」

「私は、それでいいと思っています」

それが問いかけだと、神戸小鳥には分かっていた。神戸小鳥は、僅かに身じろぎをした。

「此花さんのところに行きます」

答えはなかった。

@　　@　　@

「なあ、鳳さん。私は一体、誰なんだろうな」
ほとんど永遠とも思われるような沈黙のあと、ぽつり、と。
此花ルチアはそう言った。

あの場面で、私は、鍵を殺すべきだった。
さもなければ、せめて、千里朱音を殺すべきだった。
鳳ちはやにかまけているような場合ではなかった。
人類世界の運命がかかっているのだ。
ガーディアンの優秀なる駒として、人類への奉仕者として、此花ルチアは、そうすべきだったし、事実そのような行動を取るものだった。
本当はそのはずなのだ。
それなのに。

「……知りませんよ、そんなこと」
鳳ちはやは、それだけを言った。
もちろん、そんなはずはない。
鳳ちはやは、ガイアの魔物使いだ。
得意ではないとはいえども、魔物の作り方だって知っている。
もちろん、神戸小鳥が『鍵』の欠片をつかって、此花ルチアにしたことが、一体どんなことなのかだって、分かっている。
此花ルチアが、神戸小鳥に都合のいいように動いている理由だって、もう分かっているのだ。
自分にとって都合のいいように動いているのが、その結果に過ぎないということも。
だが。
その『結果』は、確かにある。ここにあったのだ。そうなら、それならば――
「――いいじゃないですか。仲良くできるなら、その方がいいです」
「そんなものかな」
そうやって軽く流すのだって、以前の此花ルチアならあり得ないことだ。

「そんなものですよ」

にこりと、鳳ちはやは笑ってみせて。

それからちらりと、己の手に巻かれた包帯――咲夜のかけらをそっと撫でた。

此花さんのことを言うなら、自分だって、咲夜の力を得て、何も変わらなかったと言えるのか？　しかもそれは、最強と言われる魔物の欠片なのだ。

だから――。

此花さんが、今の此花さんが、こうある理由、そんなものはどうでもいいと思った。

高い樹の枝にふたりで腰掛けていると、陽が沈んだ雲ひとつない空が青く昏く暮れていくのがよくわかる。

そして、東の空か、満月が昇ってきていた。

「月が綺麗だな」

此花ルチアのその言葉を聞いて、にこり、と鳳ちはやは笑った。

その言葉の意味を、敢えて問い返すこともせずに。

（intermission）終わる世界

それは、おおきな桜だった。

全高三万キロメートルはあろうかという桜が、直径一万キロメートルとすこしの地球に生え、三十八万キロメートルの虚空の向こう、黄金に輝くまんまるの月を目指していた。

かつて鳳咲夜と呼ばれたその魔物は、星に残されたアウロラを養分として吸い上げ、その持てる力の全てを振り絞り、それは見る間に大きく膨れ上がりながら、まるで激しい感情を以て空に手を伸ばすかのように、薄桃色に彩られた枝をぎりぎりと漆黒の闇へと伸ばしていた。

比すれば細波にもならないが、その足元では、全高数百メートルの巨大な植物が、地上のあらゆる文明の痕跡を完膚なきまでに押し流し、消し去っていく。

もし、その地上から夜空を見上げれば、月に届かんとする常軌を逸した桜が見えたであろうけれど、俯瞰すれば、その枝は、花は、月には遠く届かない。

道半ばとすらいえる距離ではなかった。

おおお……いうまるで声が、真空の宇宙に響き渡る。

それは、まるで誰かが月に抗議をしているようにも聞こえた。

「■■――」

月はそう答えると、静かにその赤いリボンを伸ばした。

数十万キロメートルの隔絶をひらひらと越えて、月は、そのリボンで、ちょん、と桜の枝に、花に、触れた。

咲夜は目を見開き、何かを言おうとした――間に合わなかった。

なぜなら、その瞬間、月から注がれたささやかなアウロラの波が、ほとんど一瞬のうちに、巨大な桜を薄桃色の粒子に変えてしまい、それは見る間に虚空に溶けて消えてしまったのだ。

しかし、その足元では、たかだか全高数百メートルの巨木の波がまだまだ荒れ狂っている。

高層ビルが、住宅街が、学校や病院が、家が、町が、コンクリートや鉄骨が、きらきらと輝くガラスの壁が――ありとあらゆるものが、その波間に呑まれ、消えていった――。

大地は激しく鳴動している。
瑚太朗は、小鳥を抱きかかえて、降り注ぐ瓦礫や飛び散った巨樹の破片を何とか避けながら、
（これは一体――震度どれくらいなんだろうな）
そんなことを思った。場違いさに、思わず笑みがこぼれた。
付け加えるならば……これは自分たちがした事だ。
誰かに問われこそすれども、自分で問う資格はないだろう。
（まあ、その「誰か」なんて、もう誰も――）
――高層ビルの巨大な塊が斜めに降ってきて、瑚太朗は跳んだ。
無益な事を考えるのを、瑚太朗はやめた。
できるならば――誰に祈るのか――そんなに遅くならないうちに、自分の体が保つうちに、この地揺れが収まってほしい。

one more kiss, one more love.

両腕に抱えた小鳥をアトリエの片隅の長椅子に寝かせると、それで全ては終わった。
風祭の学院を追われ、オカルト研究会の皆が、一時はあの≪魔女≫ですら集ったこの場所には、しかし既に瑚太朗と小鳥の他に誰の姿もない。
ルチアも、静流も、ちはやも。
誰もが、ここからいなくなってしまったのだ。永遠に。

それでも、このアトリエが≪森≫に呑まれきらずにその原形を留めているのは、瑚太朗にとっては救いだった。
一時はひどく騒がしかった場所だが、随分と静かになってしまった。
だが、それとて構うまいと瑚太朗は思う。
考えてみれば、最初から瑚太朗には、小鳥のただひとりしかいなかったのだ。
あの頃からは随分と遠いところまで来てしまったが、一周回って元のところに戻ってきたのだろう。
その遠い旅路のあいだに、少しはマシな人間になれたのだと思いたかった。

@　　@　　@

とにかく何かを食べなければならない。
そう考えたときに、突然、瑚太朗は自分が何もできないことに気づいた。
食べやすいもの、スタミナがつくもの、ほっとするもの……そんなことはいくらでも思いつくが、それを手に入れる方法はとなると、見当がつかない。
（豚肉……ホウレンソウ？）
だが、それらは要するに、スーパーマーケットで売られている食材だ。
人類は既に壊滅した。少なくとも人類文明はそうだ。
発電所が森の大海嘯に呑まれて、町から電気が消える瞬間を、瑚太朗は思い出した。
それを瑚太朗は、ガーディアンのヘリコプターから見下ろしていたのだ。
豚肉は常温では保たない。
とすると、肉を食べたければ――
（狩る、か。だけど）
瑚太朗の思考はそこで止まった。

なにも、動物を狩ることに躊躇したわけではない。
だが、狩ったとして、その動物の死骸を食材にする方法を、瑚太朗は知らない。
それに、動物の肉は火を通さなければ食べられないだろう。
そしてここには、電子レンジもガスコンロも、なにひとつない。
（全部準備している時間はないか）
最低限でも、とにかく火を熾せるものを探す必要がある。
動物の解体を学んでいる時間はない。
実践で身につけるほかないだろう。

@　　@　　@

結局、狩ったのはイタチのような生き物だった。
最初に狩ったのはリスだったのだが、小さすぎるとまともに肉をとれない事がよく分かった。

そのイタチも、まずは内臓がある身体や頭は避けた。腕と足を切り取り、皮を剥ぐと、トレイに入ってラップをかけられてスーパーマーケットで売られていた肉に近い印象になってくる。

なるほど、生き物と食材は、こう違うのか……と瑚太朗は初めて納得した。

オーロラブレードは凄まじく鋭利だ。素人の瑚太朗でもなんとか、肉を切り出すことはできた。だいぶ不格好であるにせよ。

瑚太朗だって、ここまでは何とかなるだろう、と思っていた。

ここまでは。

@　　@　　@

アトリエの小屋に戻り、小鳥が横たわるソファがある部屋の前で、瑚太朗はそっと耳を澄ました。

僅かに聞こえた小鳥の呼吸には、どうやら起きているときの気配がした。

よし。

わざとらしくならない程度に、敢えて気配を隠さず、瑚太朗は部屋に足を踏み入れる。
「小鳥」
すこしだけ小鳥は身じろぎをして、ギシ……とソファが軋む。
場違いな小鳥の甘い匂いが瑚太朗の鼻を衝いた。
「よく眠れたか？」
「ん……」
反応はあった。悪くない。
が、これは慣れないものを食べられる状況ではないか。
肩掛け鞄から、カロリーメイトを取り出して、サイドテーブルに置いた。
「食べてくれ」
それが貴重なものであることは、小鳥だってわかっていた。言葉を絞り出す。
「それは、瑚太朗君が食べてよ」
「俺は、狩りをしてきたから、そっちを食べるよ」
「狩り……？」
「ああ。たぶん、イタチかなんか」

すこし、小鳥は反応に困ったようだった。
「おなか、壊さないでね。ちゃんと焼いて、内臓はとって」
「分かってる。でも、もし何かあったら頼むな」
「……」
「ちゃんと気をつけるって。もしもだよ、もしも」
「……うん」
一応、そう言ってくれたことに、瑚太朗はほっとした。
小鳥は、獣の肉を喰おうとする俺を放って寝込んではいられないだろう。
どんな理由であろうと、小鳥があのカロリーメイトを食べてくれるなら、今は何だっていい。

@　　@　　@

肉を捌く技能は、すぐに役に立った。
予想もしない客人がやってきたのだ。

「ごちそうさまでした」
しまこがそう言って手を合わせると、その横で井子さんが、
「本当に、何とお礼を言ったらいいか……」
深々と頭を下げたので、瑚太朗はひどく狼狽えた。
「いや、そんな……頭を上げてくださいよ」
「私たち、もう三日も、きちんとしたものを食べてなかったんです」
「三日……」瑚太朗は絶句した。野獣の肉と素人の調理でも、それは美味しく感じるだろう。「大したお構いもできず」
場違いなフレーズに、井子は頭を下げたまま、目を見開いた。
それから、本当にこの青年は、お人好しなんだなあ、とばかりに、くすりと笑った。
瑚太朗は「何なんですか……」と答えたが、井子の緊張が少しでも解けた様子を見て取り、ほっとしたような口調だ。

井子さんが来た、というと、小鳥もさすがに驚いたが、ソファから起き上がって、身支度をすると言い出した。

待つことしばらく、井子としまこ、それから瑚太朗の前に姿を現した小鳥は、少なくともここ数日間のそれと比べて、いくらか、シャキッとした様子だった。

それでも井子は、小鳥に何かがあったのだと、すぐに、悟ったようだった。

一瞬で言葉を選んだのだろう、

「神戸さん、よかった、無事で」

くしゃりと、小鳥の顔がゆがんだ。井子は椅子から立ち上がると、立ち尽くす小鳥の背中に、そっと腕を回した。

やがて、井子の胸に埋めた小鳥の顔から、すすり泣くような声が聞こえてくる。

@　　@　　@

その夜。

太陽の下で動物たちが駆け回る昼と違って、夜は虫たち、そして植物の時間だ。
秋の虫たちの声もそろそろ少なくなってくる季節だ。
聞こえてくるのは、植物たちが成長……いや、巨大化、肥大化する、ぐぐ……ぐるる……という、地響きめいた低く鈍い音、そして枝葉が生えて角度を変えていく、ざわ、ざわ……という不規則な存在感だ。

そのなかに、瑚太朗は、誰かの足音をみつけた。
しまこ……のようだが、ささやかな違和感があった。
違和感には注意を払うべきだ。瑚太朗は音を立てないようにそっと起き上がり、部屋の入口の方に向き直った。
「少しはできるようになったわね」
そこには既に、その人がいた。
しまこである。少なくとも外見は。
だが。
「……朱音、さん？」

しまこ、いや朱音は、笑った。
「その通り。よく見抜いたわね。お久しぶり、天王寺。元気にしていたかしら？」

しまこ――の身体で話す朱音に、敵意は感じられなかった。
それでも瑚太朗が大げさに肩をすくめるのには、いくらかの緊張があったのだろう。
「見ての通りですよ。ドタバタもようやく全部終わったんで、ピンピンしてます」
「それは結構なことだわね。小鳥と二人きりでよろしくやっているところに押しかけて、申し訳ない限りだわ」
瑚太朗は答えに窮して、笑った。
「そうだったらいいんですけどね。ま将来的に朱音さんが言うようなシチュエーションになったら、ちょっと外してもらうことにしますよ」
「野暮はしないわよ」
しまこの顔で、朱音がにやりと笑った。
「微妙にこわいっすね、その顔は……とにかく座ってください」
椅子を勧めながら、瑚太朗は続ける。

「一体なにがあったんです？　それに、その、朱音さんの……」
「本来の身体は、此花に消し飛ばされたわ」椅子にひょいと腰掛けると、一拍おいてから朱音は続ける「此花にはすまないことをしたわね。皆にも、お前にも」
「別に、朱音さん個人の、じゃあないでしょう。でも――今、朱音さんがこうやって話しているとしたら、『聖女』の呪いは、まだ？」
すっと、朱音の目が細められた。

「ねえ、天王寺。お前、この世界は今、どんなことになっているのか、正確に把握していて？」
「いいえ」
瑚太朗は首を振った。
「俺たちは……俺と小鳥がしたことは、朱音さんは？」
「理解しているわよ。『鍵』の抜け殻を使って、咲夜の力を暴走させた……『聖女』による世界の終わりを回避するためにね。あれは天王寺の発案？」
「はい」

「やはりね。神戸には、たとえ思いつけても口には出せない方法よ。お前にしては、よい判断だったわ」
「それは……」
目の前の朱音が為そうとしたことを、止めるための手段だった。
それを朱音に褒められるのは、妙な気分だった。
『『聖女』は――『聖女』だった私は、この世界そのものが憎かった。根源的な部分で『鍵』のいうところの愛に支えられた世界が。だから全てを壊してしまおうと思った。でも、お前は違った」
「そうです。俺が望んだのは、あらゆる現状変更の意思の破壊で――まさか」
そこまで言って、瑚太朗は絶句した。
「そう。恐らくは、お前なのよ。『聖女』の概念そのものを、あらゆる変化への意思とともに、この世界から消し去ってしまったのは」
「私が消えなかったのは、きっと、本来の私が怠惰過ぎたからね」
にやり、と朱音は笑い、その言い方に、瑚太朗は思わず苦笑いした。

「なんか、納得しますね、それ」
「でしょう？　……いいのよ。自分でも納得感、あるし。私は所詮、鹿島桜の魂を移植するのに、ちょうどいい器だったっていう、ただそれだけなんだから」
「でも」瑚太朗は、ぽつりと呟く「会長は生き残った。……どうして、ここに？」
「ここに来たのは、井子としまこよ。私じゃない」
「俺に会いに来たのは？」
「ま……」
息を吐き、視線を瑚太朗から外し、ややあって。
「笑わないかしら？」
「もちろん」
静かに、明確に、瑚太朗が答えた。
そこに、恐らくは真摯さのようなものを受け取っただろう。
「私はね」
朱音の口が、ゆっくりと言葉を紡いでいく。

「私は、しまこに生きて欲しいのよ。私に似た子に、私と同じような運命を辿るのではなく、私とは違う、何にも縛られない生き方を……そのためなら天王寺、私はお前に協力してもいいと思っているわ」

@　　@　　@

ごぅおおおぉ……ん……、と、遠い雷が鳴り、瑚太朗はほとんど崩れかけた建物の入口から、空を見上げた。

鼻には、濃厚な土のにおい。

どうやら一雨きそうな気配だ。

じっとりと湿った空気に、シャツが肌にまとわりつくのがわかる。

湿った服は派手な動きには向かない。

が、目的が廃墟――ほとんど森に呑まれてしまっている風祭市の無人のビル街――の探索である以上、脱いでしまうと、それはそれで擦過傷の原因になる。

どうしたものか、と瑚太朗は逡巡していたが、やがて腹を決めた。

（雨宿りだな……）

村に帰るのは、雨が落ち着いてからにした方がいいだろう。

どうせ雨では畑仕事はできないのだ。

それに、どうやらここは、探索しがいのある場所の臭いがする。

瑚太朗は、目の前の巨大な構造物を見上げた。

ここはガーディアン極東教区風祭支部の、隠匿された基地だった場所なのだ。

食料。それとも、魔物なり超人なりに関する調査、または……研究、の記録。

それは、これからの自分たちが生きていくための、貴重な知識であるはずだった。

電気が通っていた。

≪破滅≫のあとにあって、それは完全に異常な事態だった。

（――どういうことだ？）

暗闇の中にぽっかりと浮かび上がる非常灯

ガーディアンの擬装軍事拠点、風祭第二支部N109棟、その地下百メートル。階数にすれば二、三十階にはなるだろう。

建物自体は十階建て程度だから、明らかにこの構造物の本体は地下にある。
そしてもちろん、その地下百メートルに至る、研究室の群の合間を縫うように走る迷路のような通路には、人の気配もなく、機械の気配もなく、火や電灯の明かりのひとつもなかったのだが……
しかし、エレベーターの縦坑の非常梯子を降りて、その最下層に降りたった瑚太朗の目の前に、その緑色の非常灯は、まるで場違いな様子で、ぽつりと、静かに、しかしはっきりと輝いていた。
非常口の、ドアから逃げ出す人のピクトグラムを眺めて、瑚太朗はそっと息を吐いた。
（逃げたすべきなのかも知れないけど）
――だが。
（逃げ出す先なんて、ないか）
そう。そもそも、この場所は――俺たちが生きているこの世界は、あらゆるものから逃げ出した先の、行き止まりのユートピアなのだ。
ならば、あるいはこの灯りは、あり得ないはずの、残された人類世界の光は――何かのブレイクスルーになりうるかも知れない。

（行ってみるか）

瑚太朗は、ごくりと息を呑み、そして足を踏み出した。

まるで魔法陣か何かのような部屋だった。

天井や床には、同心円状に機械や光るラインが埋め込まれていて、まるで何かを守るように、リング状の構造物が、幾重にもなって浮遊し、重々しく、しかし縦横無尽に回転していた。

その中心にあるのは……それを吹き抜けから見下ろす瑚太朗には、棺に見えた。

人がちょうと収まるくらいの少し薄い直方体で、中央部より少し端に寄ったあたりの幅が僅かに広く、何かの蓋のようなものがついている。

そして、その棺から管かケーブルのようなものが伸びていて、壁際の何か……生化学的なガラスと鉄と計器の集積構造物に繋がれている。

よく見ると、回転するリングはCの字のように薄い切れ込みがあって、ケーブルを綺麗に避けるようにコントロールされているらしいが、その隙間は輝く何かで充填されてい

て、それがどうやらリングの完全性のようなものを保っている……ように瑚太朗には感じられた。

ということは。

小太郎はキャットウォークから鉄製の無骨な階段を下り、フロアに降りると、その棺を視界に納めながら壁際の機械に近づいた。

計器のいくつかを確認してみるが、いずれも針はレッドゾーンに入っておらず、三色のランプは赤や黄はなく、すべては青だった。

……こいつは、生きてる。

人か、超人か、はたまた獣かキメラかサイボーグか。

いざとなれば一撃で屠るつもりで、瑚太朗はポケットからカッターを取り出し、それで腕を切った。切り傷からアウロラが溢れ出し、それを瑚太朗はブレードに整形する。何者をも貫き、概念のレベルで切断する、それは神の力の断片だ。

見ると、回転するリングの下は、中心に近づくにつれて下り坂になっており、棺の下には、底の知れない穴になっている。

どうするか。

最も外縁でゆっくり回転するリングを揺さぶってみる。最初はそっと、そして乱暴に。

リングの動きは全く揺らぐことがない。

足をかけてみる。リングのスピンに足を取られそうになるが、体重を乗せても全く問題なさそうだ。

同心円状に立体的に重なってバラバラの方向に――そう見える――回転しているが、テンポよくジャンプしていけば、中心の棺にたどり着くことはできそうだ。

すっと瑚太朗は膝を曲げた。

小さく息を吸うと、一瞬、その目が回転する多重構造体を見て――次の瞬間、瑚太朗はバネのように飛び上がった。

最外郭のリングを跳ねるように蹴り、そのまま、タッ、タタッ……といくつものリングをまるで飛び跳ねる虫のように蹴上がっていく。

そして棺の直上あたりから、その瞬間だけぽっかりと空いたリングの隙間を落下し、硬い靴音とともに瑚太朗はリングの中心に降り立った。

そのまま身をかがめると、瑚太朗の頭上を、回転するリングが通り抜けていく。
計画通り、間一髪だった。

「ふう……」
息を吐いて、瑚太朗は足元の棺を見下ろした。
棺の端の方に、小さなガラス窓がついているのがわかった。
まるで……いや、まさに、それはのぞき窓に見えた。
やっぱりか。
瑚太朗は、かがみ込んだまま、そののぞき窓の方にそっと移動する。
曇っているかとも思ったが、温度湿度ともに、コントロールは万全らしい。
瑚太朗はそのまま窓をのぞき込んで――その瞬間、目を見開いてのけぞった。
誰かが、目を開いた。
閉じられていた瞳が、瑚太朗にのぞき込まれた瞬間、まるでそれに反応するかのようにぱっちりと開かれ、それが瑚太朗の目をまっすぐに見たのだ。
（なん……）

その目に、見覚えが――突如、後頭部に衝撃が走り、瑚太朗の意識が飛んだ。
のけぞった瑚太朗の後頭部を、回転するリングが直撃したのだ。
（しまっ……！？）
そう思った瞬間には、瑚太朗はもう空中に投げ出されていた。
オーロラブレードは――意識が飛んだ一瞬の間に、形象崩壊が始まってしまっている。
「くそっ！」
手近なリングに手を伸ばす――届かない！
姿勢はもう、落下に入っている。
視線の先には、ぽっかりと口を開ける穴と、底の知れない闇。
（まずい……！）
そう思ったときだった。
――瑚太朗の背後で、なにか……なにかの蓋が吹っ飛ぶような音がした。
そして、次の瞬間、瑚太朗は背後から何かに引っ掴まれ、急激な加速度とともに空中に持ち上げられていた。
首をひねり、背後を見る。

そこにいたのは。

「い……委員長！？」

瑚太朗は、思わずそう叫んだ。

そう。

その姿は、背後から瑚太朗の首根っこを掴んで、瑚太朗の窮地を救ったのは――《世界の終わり》で千里朱音と差し違えたはずの、オカ研の仲間である委員長、此花ルチアそのものだったのだ。

だが、一瞬で瑚太朗は、それが『違う』と悟った。

『委員長』という呼びかけに全く答えないばかりか、なにしろその、委員長らしき人間は、委員長の超振動ブレードと全く同じに見える刀を手にして、全く無表情でありながら、その――布きれ一枚も纏わない、真っ裸だったのだから。

@　　@　　@

とにかく村に戻ろう。

瑚太朗はそう思ったが、全裸の委員長……と同じ外見の女の子を連れて行くわけにもいかない。

とにかく瑚太朗は、街がまだ生きていた頃の記憶を辿って、服を調達することにした。

たしか、いつものヴァスコにRight-onがあったはずだ――小鳥と買い物に来たこともある店だ。

そんなことを思い出しながら、ガーディアン風祭第二支部N109棟の擬装された建物を抜け出し、崩壊したヴァスコの瓦礫の下から、Right-onの倉庫に潜り込むのに、もちろん彼女の超振動ブレードは役に立った。

ヴァスコの瓦礫の山を目にして――概ね想像通りだったが――ため息をつく瑚太朗に、彼女は言った。

「どうしたんだ？」

瑚太朗のカーキ色の上着を羽織った彼女のその声もまた、記憶にある此花ルチアのそれと全く同じだ。

「この先に、服屋があったんだけどな……」

「服が欲しいのか？」
瑚太朗は肩をすくめた。
「君に上着を取られてるし、そのまま村に帰るわけにもいかないだろう」
「それなら返そうか」
「それはそれで目に悪い」
「……」
少し考えるそぶりを見せるが、瑚太朗は重ねて声をかける。
「ルチアの知識にあるだろ？」
「知識としては理解できる」
「なら、そういうことさ」
「私の記憶は、合理的ではないな」
「ま、いずれ分かるよ――切り開けるか？」
「任せておけ」
彼女はそう言うと、超振動ブレードを構えると、ヴァスコの廃墟に向かって跳躍した。

メモリークローン、と彼女は言った。

生物的には――此花ルチアが生体兵器ではなく生物だとすれば、の話だが――彼女は、此花ルチアと同一の遺伝子を持っているらしい。

厳密にはクローンではなく、同一の生産ラインから出力された別個体ということだが、ルチアが実戦兵器として位置づけられ、それがために名前をつけられたのと対照的に、彼女はルチアのバックアップであり、あの『棺』から外に出たことがないのだという。

しかしそれでも、彼女が言語を操り人と話し、あまつさえ動いてみせたのは、此花ルチアの記憶が知識として彼女に埋め込まれているということだ――。

隣を歩く彼女から、そんな説明を受けながら、瑚太朗は村への岐路を辿っていた。

「此花ルチアの記憶を収めた膨大な情報量のセル・チップが、私の頭には埋め込まれている」

ヴァスコのRight-onの廃墟から掘り出した、シックなワンピースとジャケットに身を包んで、とんとん、と側頭部を叩きながら、彼女は言った。

「私は優秀だぞ。なにしろ私のオリジナルは学業成績優秀で、そのうえ文武両道だったからな」

「ああ、知ってるさ」
「もっとも、天王寺瑚太朗、お前とはあまり仲が良くなかったようだったが」
「そこは引き継いでくれなくていいんだ」
瑚太朗はそう答えて笑った。
そして――どうも、自分が悪い印象さえ与えなければ――最初から此花ルチアとは、仲良く出来ていたのかも知れない。
そう思った。

@　　@　　@

雨上がりのぽっかりとした青空に、幾筋かの煙が立ち上っていた。
それを目当てに歩けば、村にたどり着ける。
森は日に日に濃くなっていき、昨日と同じ姿を見せることは決してないが、あの煙だけは変わることがない目印だ。

もっとも、最初は瑚太朗が小鳥の元へ戻るための、純粋な道標としての狼煙にすぎなかったのが、今ではいくつもの竈が朝に昼にと煙を上げている。

そのことに思いを馳せて、瑚太朗はなんだかほっとしたような気持ちがした。

@　　@　　@

小鳥のアトリエ……かつてはそうであった場所には、いくつもの掘っ立て小屋が建てられていた。

とりあえずは雨露をしのげる、といった程度のものだし、水浴びや手洗いは共用で――気を遣いあって――川で済ませるしかないのだが、それでも小屋に人が住めば、それは家だし、家族ならばなおさらだ。

その家が集まれば、その場所は群れ――すなわち《村》と呼ばれる場所になる。

その入口に立って、アカリは目をぱちくりとした。

「こんなに人間が生き残っているとは思わなかった」

「俺もさ」

その人数はせいぜいが二百人にも満たないが、そこには生活があった。

畑や――誰かが農産物の種を持ち込んだのだろう――どうやら炭焼き小屋のようなものもあった。

寒い場所では、火を熾さなければ、人は生きていけないのだ。

地面が掘り下げられているのは――

「あれは井戸か？」

「ああ」

わずかに、胸を衝かれたような顔を、アカリはした。

ルチアの記録が示す《破滅》と、目の前の風景を、あるいはアカリは見比べているのかも知れなかった。

と、瑚太朗は妙なことに気づいた。

村の入口あたりの畑で、いつもなら野良仕事をしている人たちが、いない。

「どうした？」

「いや……」瑚太朗は口ごもった。
そのとき。
「――！」
瑚太朗の耳に、何か、遠い悲鳴のような声が聞こえた。
猛然と彼女が頭を振り上げた。
「誰かが助けを求めている……！」
言うや、
「おい、ちょっと！」
瑚太朗が止めるのも聞かずに、突風のように走り出した。

≪鍵≫のアウロラで強化した足で、瑚太朗はなんとか彼女を追いかけた。
（広場？）
それは、小鳥のアトリエのエリアのなかでも、比較的開けた場所で、二十メートル四方ほどの空き地を囲んで、粗末な家が建ち並んでいる場所だった。
風を切りながら、瑚太朗は違和感に気づいた。

（一軒、なくなって……！？）

否、なくなっているのではない。

瑚太朗の記憶にあったその家は、ほとんど完全に倒壊しかけていた。

人々が、その家を取り囲んで、口々に叫び声を上げていた。

男達が、今や倒れようとしている太い柱を、なんとか支えようと、必死に力を込めている。

その真下には、瓦礫に半ば埋もれるように、人の影があった。

それが、今まさに押し潰されようとしている――！

「委員長！」

瑚太朗は咄嗟に叫んだ。

「どけーッ！！」

裂帛の気合いで、彼女がほとんど滑空するかのように飛んだ。男達がはっとこちらを振り返り、突進してくるその姿を見るや、蜘蛛の子でも散らすように飛び退いた。

彼女は、彼女の剣を――超振動ブレードを両手で構えた。刃が赤く輝くのを、瑚太朗は見た。

彼女と剣と切っ先が丸太に突き刺さるや、まるで刀が豆腐を裂くが如く、丸太は真っ二つになった。

それを認めるか認めないかのうちに、彼女は空中で姿勢を反転させた。

そして、真っ二つになった丸太を両足で蹴り飛ばしたのだ。

広場の隅で転がっている真っ二つになった丸太は、まるで計算されたかのように、全く何にも被害を出していなかった。

「本当に……なんとお礼を言っていいやら……」

老人が彼女に、何度も何度も頭を下げていた。

その家にいたのは、娘と孫だという。

「いいんです。私ができることをしただけで」

さっと頭を下げると、老人は、涙を流した。

他の人々は、助け出された人たちの声をかけたり、手当てをしたりしていたが、瑚太朗達に声をかけるのは、躊躇われるようだった。
それはそうか、と瑚太朗は思う。
身も知らぬ女性が、常識では考えられない力を個人的な振るったのだ。
不用意に声はかけられないだろう……が。

「戻ったのね、天王寺」
よく知った声に、瑚太朗は振り向いた。
しまこの声だが、口調は明らかに朱音だった。
案の定、そこにいたのは、しまこと、しまこの体を借りた朱音だった。
「ああ、ついさっき――ただいま、会長」
「天王寺、お前はいつも、面白いことを運んでくるわね――久しぶり、と言えばいいのかしら？」
朱音の声色に、アカリは首をかしげた。
「その……失礼だが、あなたは此花ルチアの知人なのか？」

朱音が、僅かに苦笑いしたように、瑚太朗は思った。
「どうでもいいのよ。そんなことは。それより天王寺、お前の連れが持っているのは、此花ルチアと同じ得物ね？」
「あ、ああ……型番とかはわからないけど、よく切れるのは間違いない」
「それなら十分。お前、此花ルチアでないのは分かるけど、名前は？」
彼女は、僅かに眉をしかめた。
「特にはない。コードネームはL-0035だ」
「それは名前とは呼ばないのよ」
若干呆れた声で、朱音は言った。それから、
「それなら――そうね。お前、これから此花アカリと名乗りなさい」
「アカリ？」
「そう。此花アカリ。お前はルチアではないし、そもそもルチアなんていう名前は、少し気取りすぎだわ。ここでは、シンプルに日本語でアカリでいいでしょう」
「――」
突如つけられた名前に、彼女はどう反応したらいいかわからないようだった。

「まあ、気に入らなければ自分でなんなりと名乗るといいわ――それでアカリ」
「え？」
「いきなりだけど、お前に頼みたい仕事があるのよ」
仕事、と聞いて、彼女――アカリは、意外そうな顔をした。
「それは構わないが、何なんだ、その仕事というのは」
「最近は人が増えてきて、それはそれで人間らしい問題が出てきてね……そこで、お前の膂力と、お前の持つ武器で――」
朱音は、ちらりと人だかりの真ん中、倒壊した掘っ立て小屋をちらりと見た。
「――家を建てて欲しいのよ」
「家？」
アカリは目を丸くした。

@　@　@

小鳥は昼間はベッドから起き上がってこない。

ただ、陽が沈み、≪村≫が寝静まった頃、小鳥は思い出したように目を覚まして、空を見上げる。

瑚太朗はそれを知っているし、毎晩でもその顔を見にいきたいのだが、それをぐっと堪えるようにしていた。

やがて東の空が白みはじめ、鴉が鳴き始めると、まるで人々が起きてくるのを怖れるように、小鳥は戻ってくる。

その気配で起きたふりをして、瑚太朗はすこしだけ小鳥と会話を交わすのだ。

今日は、そういうわけにもいなかい。

明け方、小鳥がアトリエに帰ってくる。

≪村≫の広場や集落からは、随分外れた場所だ。

遠くから人の気配はするが、アトリエはひっそりと静まりかえっている。

「おかえり、小鳥」

「ん……」

小鳥はそう答えると、ソファベッドに突っ伏した。
瑚太朗は、わざと――しかし、わざとらしくならないように――ごそごそと毛布から出ると、ベッドから下りた。
小鳥が身じろぎをする気配がした。
いつもなら、瑚太朗はそんなことはしないのだ。

「小鳥、ちょっと聞いてほしい」
「……」
声をかけると、小鳥の返事はない。
が、話を聞いていないわけではないのが、瑚太朗には分かった。
多分に緊張もあるだろう……が、話し続けるのが危ういような様子ではない。

「困りごとがあるんだ。最近、随分人が増えた。……それは、小鳥は、知ってるよな？」
無言。
肯定だろう。

「みんな穏やかな人たちだ。なんとかやっていけている。畑を作って……俺もたまに手伝ったりしてさ。着るものは、まあ、当面はなんとかなる。ヅャスコから掘り出したりしてるけど」

食べるものも、着るものも、贅沢は言えない。

それでも何とかなっているのは、要するに、現状を変える意思もあるものすべてを、≪破滅≫が消し去ってしまったからに他ならない。

最早ここは、世界の終りなのだ。

だが。

「だけど……住む場所だけはどうにもならない。ベニヤ板を拾ってきて、何とかしてみているけど……丸太で補強した家が、今日崩れた。やっぱり、ちゃんとした家を建てる必要があるんだ」

瑚太朗は敢えて、この小鳥のアトリエについては、言及しなかった。

≪村≫のひとは、この小屋のことを知っていても、ここで雨風を凌ごうとはしなかった。

小鳥と瑚太朗がしたことを、明瞭に知ってはいなくても、しかし、この場所が異様な場所であることは、一目見て分かる。

ここで何かが行われたのだと、誰もが察している。

その結果として、このアトリエだけが――おそらく地球上でただひとつの――人が住みうる場所として残っているのだ。

「なあ、小鳥。俺たちは、家を建てる必要がある。今日、またひとり、生き残りを見つけた。そいつが森を切り開けると思う。材木も手に入る。でも、俺たちには、家の建て方が分からない」

瑚太朗は、少し間を置いた。

「たしか、小鳥の部屋に、ログハウスの建て方の本、あったよな。あれを、貸して欲しい」

何を言うのか、見透かされていた気がした。

それは、小鳥の濫読の一環として、≪鍵≫の本質たる樹木に、人類がどのように立ち向かい、手懐け、利用してきたのかという、その歴史の一巻として、小鳥の書庫にあった。

……答えはない。

「キツいときに、ごめん。でも、小鳥の部屋に入るなら、小鳥に黙って行くわけにはいかない。許してもらえるなら、俺ひとりで行くし、他のものは何も触らない」

小鳥の答えはない。

まあ、急な話だ。

話すべきことを話し終わると、瑚太朗は少し気が楽になってしまった。

黙ってやってしまえばよかったのかも知れないが、気が引けた。

それは瑚太朗の利己心かも知れなかった。その自覚はあった。

「……考えてくれると、嬉しい。でも、忘れてもらっても、構わない。勝手にはしないから」

それから、付け加えた。

「ごめん」

そう言って、瑚太朗は小鳥に背を向け、一歩足を踏み出した時、

「待って」

瑚太朗は息を呑んだ。

が、その気配を出さないように努めた。

「ん」
肯定だけして、あとは小屋の外の音を聴くことにした。
木々がざわめく音が――≪破滅≫のあとの森の、風にそよぐ音、木々に水が流れる音、そして異様な速度で木々が生長していく音が――聞こえた。
虫たちも鳴いている。季節は秋に落ち着きつつあるらしい。
そして、小鳥が身じろぎをする音。
「……ふしだらＮＧ」
「そうだな」
「瑚太朗君、あたしの部屋に入ったら、ふしだらな事しそうだから」
「かもな」
「だから、あたしが見張ってないと、ダメ」
その声の低さに、瑚太朗は意思を感じた。
「そっか」
間があって、
「うん」

行く、という声だった。
「ありがとな」
「でも、今日はもう眠い。起きたら行こう」
「わかった」
小鳥が起きるのは、夜になる。
それは瑚太朗も、分かっていた事だった。

@　　@　　@

世界は遍く森に呑まれてしまったが、小鳥のアトリエは≪破滅≫の前の原形を保っていた。
理由はいくつか考えられるが、≪破滅≫の爆心地であった事より、むしろガイアの術式が既に存在していたことの方が大きいだろうと瑚太朗は思っていた。
小鳥の家の周囲だけは、なぜか≪森≫に呑まれず、ごく普通の――というには進行が早い気もするが――荒廃の仕方をしていたからだ。

森を抜けると、まんまるな月が頭上に輝いていた。
不思議な光景だった。
この一区画だけが、まるで、普通の廃墟みたいだった。
「不思議」
小鳥がちいさく呟いた。
「まるで、何もなかったみたい」
人の気配も、街灯や窓の明かりも、なにもないのだから、それだけでも「何もなかったみたい」なはずがない。
瑚太朗は妙におかしくなった。
ただ、小鳥の言っている事も、わかる。
≪村≫はもう、かつての文明世界とは全く違う生活を作り上げつつある。
畑を耕し、獣を狩り、粗末な小屋に住むその光景は、まるで原始時代だ――というのは言い過ぎだろうが、と瑚太朗は口の端で小さく笑った。
しかしここには、かつて文明世界があったことを示す、建物があり、道路があった。

それは、残り滓というより、残り香のように瑚太朗は思えた。
かつて俺たちは、ここで生きていたのだ、そのことの証拠。

神戸家は、かつて小鳥の両親を魔物に転用して以来、荒れ果てるままになっていた。
もちろん他の家だってそのはずだが、小鳥はこの家の大部分を――やむなくとは言え――意図的に放棄したのだ。
そのことの違いが、恐らくは小鳥にとって重大なことだろう。

小鳥から鍵を受け取ると、玄関の鍵を開け――そんなことをするのは、いつ以来だろう――中をのぞき込む
魔物の気配はない。
リトルフォレストの結界が、今も有効に働いているのだろう。
小鳥がスリッパ立てから二組のスリッパを取り出すと、床に静かに置く。空気に押されて、ぱふ……と埃が僅かに舞った。
「どうぞ」

「ありがとう」
しぜん小さく声を交わし、家に上がる。

小鳥の部屋は二階だ。
階段を上がると、ぎしりと木が軋む音がした。
その小鳥の部屋に、瑚太朗は二度三度、上がったことがある。
壁一面のスライド式本棚に、みっしりと並べられた、本、本、本。
『医学、地理学、地質学。郷土史、植物学、民俗学。ガーデニング、生物学、生態学、動物学……』
かつて彼女は、歌うようにそう説明してくれた。
その、『ガーデニング』のあたりに、その本はあった。
『ログハウスを建てよう!』
瑚太朗は、ちらと小鳥を見やった。
「いいか?」
小鳥が黙って頷いた。

瑚太朗は『ログハウスを建てよう！』に手を伸ばす。
ぱらぱらとめくると、場所の選び方、地ならしのやり方、木の選び方、加工の仕方、丸太の組み立て方……ひととおりの方法論が載っているようだった。
そこに載っている写真は、小鳥のアトリエの小屋に造りが似ている気がした。
おそらく小鳥は、この本を元にして、魔物に建てさせたのだろう。
ふう、と瑚太朗は一息ついた。
アカリの超震動ブレードと腕力があれば――もちろん、瑚太朗自身の膂力もだ――魔物はいなくとも、家を建てる事はできるだろう。

@　　@　　@

≪村≫に帰ってきてもなお、夜は半ばだった。
もちろんそうだ。
遥かに隔絶してしまったとはいえ、物理的な距離は、知れているのだ。

村の広場に、アカリが待っていた。
満月を背に煌々と照らされるその姿を見て、小鳥は立ち竦んだ。
アカリのことは道すがら話してはいたが、その姿は、かつての此花ルチアと瓜二つだった。
アカリは、立ち竦む小鳥と，そばに立つ瑚太朗のところまで、ゆっくり歩み寄る。逆光だが、柔和な顔だと分かった。
「神戸さん、私は此花アカリという。先日からこの≪村≫で世話になっている……微妙なところだが、はじめまして、よろしく」
小鳥の唇からなにかの音が漏れた。
「ああ、大丈夫。無理に話さなくていい……天王寺、本は？」
「見つけた。これだ」
ちらりと小鳥を見てから、瑚太朗はアカリに『ログハウスを建てよう！』を手渡した。
受け取って、ぱらぱらとめくって、アカリは、大きく頷いた。
「うん、これなら何とか建てられそうだ。沢山の人が助かる。神戸さん、ありがとう」
その言葉を聞いた瞬間、小鳥が、ふらり、とよろめいた。

「小鳥！」
瞬時、瑚太朗が抱き留める――目眩、だろうか。
「悪い、アカリ。俺は小鳥を連れて行く。また後で」
「分かった」
アカリはそれだけ短く言うと、さらりとその場を去っていった。
表情が、しまった、と語っていた。
小鳥は、声もない。
「行こう」
瑚太朗は、身をかがめると、小鳥の肩に腕を回した。

小屋に戻ってくると、小鳥はそのままソファベッドに倒れ込んだ。
緊張していたのだろう。
それはそうだ。
≪破滅≫以来、はじめて≪村≫の外に出たのだ。
しかも、他の誰かのための知識を手に入れるために、だ。

そしてアカリのあの言葉。
小鳥は、突っ伏したまま動かない。
瑚太朗は、努めて冷静にしようとした。
「お疲れ、ごめんな……おやすみ、小鳥」
その声は震えていなかったと思う。

@　　@　　@

数日後。
小鳥はまた、夜になると起きだしてくる。
普段は、瑚太朗が入れ替わるように床につく。
――今日は、渡すべきものがあった。
瑚太朗は、机から一葉の紙を取り出した。

改めて中身を確認すると、椅子から立ち上がり、ソファベッドに突っ伏している小鳥に近づいた。

「なあ、小鳥」

「ん」

小鳥は顔を上げた。

神戸家への往来からこちら、さすがに小鳥は疲れているのか、言葉少なだった。

が、少しだけ……ほんの少しだけ、表情がよくなった、ような気がする。

それとも、自分のほうを見て話してくれている、ような気がしているのかも知れないが、実際には分からない。

小鳥の横顔を確認してから、瑚太朗は、

「これ、手紙」

そう言って、手にした紙を差し出した。

「……？」

小鳥は少し怪訝な顔で、しかし半ば反射的に、それを受け取った。

「ログハウスの第一号に入った、シマさんから……大丈夫、変な事は書いてないから」
一瞬目がきゅっと細くなったのを見て、瑚太朗は付け加えた。
「ありがとうって言ってた……この前、シマさんの小屋が崩れてさ、他の小屋に間借りしてたんだ」
アカリが《村》にやってきた日に倒壊した、あの小屋だった。
なんとか難を逃れて、今日はじめて完成したログハウスに入居したのだ。
ほとんど実用試験を兼ねての事だが、シマ老人は同意してくれた。
これは老人の仕事だ、と笑って。
「まあ、気が向いたら読んでみればいいと思う」
曖昧な言葉を瑚太朗は口にした。
無理をしてすべきことじゃない。
『ログハウスを建てよう!』みたいな、今差し迫っている問題があるわけではないのだ。
……それでも、期待めいたものは、瑚太朗にはあった。
「それじゃ、俺はちょっと、向こうにいるから」

そう言って、瑚太朗は隣の部屋に引っ込んだ。

@　　@　　@

しばらく雑用をこなして、それから瑚太朗は夕食の準備をした。
獣の干し肉と、雑穀と根菜の粥。
代わり映えしない、いつもの献立だ。
が、ふと瑚太朗は思い立った。
裏の畑に出て、小さな菜園の様子を見た。
水菜もリーフレタスも、悪くない。
そっとちぎって、口にしてみる。
おいしい。
瑚太朗は思わずにっこりとした。

二人分のささやかなサラダを作ると、瑚太朗はその一皿を持って、小鳥の様子をそっと伺った。
小鳥は、ソファベッドにいつものように突っ伏していた。
その枕元に、シマ老人の手紙がそっと置かれていた。
おそらく、少なくとも、読み始めはしたように瑚太朗は感じた。
そして、小鳥の肩が、時折ちいさく震えている。
瑚太朗は、声をかけることにした。
「小鳥、大丈夫か？」
返事はなかった。
が、突っ伏したまま、小さく首を縦に振った……ように瑚太朗には見えた。
そこに迷いは感じられなかった。
「わかった。……サラダを作った。テーブルに置いておくから、食べてもいいよ」
それだけ言って、瑚太朗は、少し散歩でもしてこよう、と思った。

@　　@　　@

少しだけ心が落ち着いた頃、小鳥はのろのろと顔を上げた。
一度泣いてしまうと、おなかがすく感じがした。
そういえば、瑚太朗君が、何か置いていってくれたのだったか。
小鳥はサイドテーブルの方に目をやって、
「あ……」
声にならないような音が、喉から漏れた。
それはいつか、瑚太朗に話した事があったレシピだった。

『リトルフォレスト……何号だったっけ？　これ、食べられるのか？』
『人間をやめることになってもいいなら、消化はできますぞ』
『こわ！　めっちゃこわ！』
『瑚太朗君、サラダ好きだったっけ？』
『いや……でも、なんか美味そうに見えてさ』
『それなら、こっちのレシピが人間向けだよ……』

そんな会話のことを、小鳥は今まですっかり忘れていた。
でも、瑚太朗はずっと、覚えていてくれたのだ。
恐る恐る、小鳥はフォークに手を伸ばした。
そして、緑のそれをすこしだけ掬い、そろそろと口に運ぶ。
おいしい。
おいしかった。
そう思った瞬間、小鳥の目に、また涙があふれてきた。
「どうして……」
それだけを口にして、小鳥はベッドの上にうずくまった。
分からなかった。
私が≪破滅≫を連れてきたのだ。
私のせいで、こんなことになってしまったのだ。
ずっとそう思ってきた。
それなのに。

どうして、みんな、そんなに優しいのか。

その答えを自分で知っているのか、知らないのか、それすら知らないまま、小鳥はうずくまったまま、泣き続けていた。

@　@　@

しばらくの時が流れた。

@　@　@

こんな世界の終りでも、季節は巡る。

厳しい冬を――何人かの脱落者を出しつつも――なんとか越え、いくらか肌寒くあっても夏を過ぎた頃。

畑仕事からの帰り道、瑚太朗は見知った顔を見つけた。

「アカリ、元気か？」
「見ての通りだ」
アカリは薪割りをしていた。
手に持っているのは、超振動ブレードではなく、シンプルな斧。
その光景も、だいぶお馴染みになっていた。
「薪、足りそうか？」
「去年と同じくらいは。でも、もっと寒くなっていたら足りなくなる」
「また斬りにいかなきゃならないな」
「そうするつもりだ。何人かとは話をしている」
アカリはそういって、空を見上げた。
青い、高い空だ。少し高台になっている場所では、特にそう見える……眼下というほどでもないが、≪村≫のささやかな家々が見て取れた。
「アカリにいてもらって、本当に心強いよ」
「褒めても何も出ないぞ？」
「そんなつもりはないさ」

「それならいい……家に帰るのか？」
「ああ」
「それじゃ、小鳥によろしくな」
アカリはそう言って、仕事に戻る。

坂を下ると、用水路のところに腰をかけて、シマ老人が空を見上げていた。
ログハウス第一号の住人だ。
「瑚太朗君」
「シマさん……いい天気ですね」
「ああ……」
なんとはなしに、隣に腰掛ける。
「いい天気か」
シマ老人は、瑚太朗の言葉を、小さく反復した。
「どうかしたんです？」
「いや……」

言って、老人は息を吸い、そして吐いた。
「どうも、年をとったせいか知らんが……去年より、寒いような気がしてね」
「それは……アカリも言っていました」
「アカリちゃんが言っているなら、年のせいでもないし、その他のせいでもないな」
老人が笑った。
アカリがガーディアンの人工生体兵器であることを、老人は知っていた。
この老人は、もともとガイアの魔物使いだった。
この村の人口は、数百人で止まったが、その中には、ガーディアンも、ガイアもいた。
ただ、皆、穏やかな人々であることは共通していた。
「……やはり、寒くなっているんじゃないかね？　瑚太朗君」
その問いに、瑚太朗は少し黙り込んだ。
農作業の都合上、気温の記録はずっとつけていた。
確かに今年は、去年よりも随分と寒い。

それが短期的な現象なのか、長期的な現象なのかは、少なくとも数年単位で観測してみないとわからないが、≪破滅≫が遅効性の世界の終りをもたらそうとしているとしても、不思議ではない。

瑚太朗が黙り込んだのを見て、老人は何か察したようだった。

「何か、考えなけりゃならないかね……」

そう言って、老人がまた空を見上げ、瑚太朗もつられるようにして倣った。

空の青が、さっきよりも少しだけ、冷たいように、瑚太朗は思った。

@　　@　　@

その夜。

暖炉に火を入れるにはまだ随分と早いが、瑚太朗も小鳥も、もう冬物を着るようになった。

その服も、そろそろ自分達で作らねばならない。

小鳥は椅子に座って、セーターを編んでいた。

その背後の本棚には、かつて神戸家の小鳥の家にあった、たくさんの書物が並べられている。
智恵で人を導くのがドルイドだとするなら、小鳥はこの《村》の、間違いなくドルイドだった。

「ねえ、瑚太朗君」
「うん」
瑚太朗は、読んでいた本から顔を上げた。
最近瑚太朗は、ヒトが集団で生きる術……というようなものを好んで読んでいる。
勉強が出来るわけではないから、難しいのだが。

「今年は、ちょっと寒くなりそうだね」
「ああ……不思議だな、今日その話をするのは三回目だ」
「そうなの？」
「アカリと、シマさん」

「あの二人か……」
小鳥の表情が、わずかに真剣味を帯びた。
「厳しい冬が来そうなのか？」
「たぶん。アウロラの残滓が、だんだん冷めてきてる感じがして」
そのことの意味は明瞭にはわからなかったが、単語からすると深刻だ。
「で、どうするのかしら？」
しまこ……ではなく朱音が言った。
今までこの部屋には、瑚太朗と小鳥しかいなかったはずなのだが、その神出鬼没さに、二人は慣れきっているようだった。
「……」
小鳥が答えないので、瑚太朗が口を開く。
「もっと薪をとってくる？炭焼き小屋も増やすとか」
「原始人ね」
「悪くないとは思いますけど」
もちろん朱音も分かって言っているのだ。

「……それで済むかな」
小鳥が、ぽつりと言った。
「どういうことだ？」
「星がどんどん寒くなっていくとしたら、もしかしたら、それだと……」
語尾は宙に消えたが、意味は十分に伝わった。
「朱音さんは、その話をしに？」
「聞きつけたのよ。いずれ話す事だと思うし」
「何かいい手が？」
「いいかどうかは知らないけど、手はあるわね」
その言い方に、瑚太朗は僅かにひっかかりを覚えた。
と、小鳥が口を開いた。
「それは……朱音さん、どんな方法なんですか？」

@　@　@

朱音としまこが帰って、随分と遅い時間になっていたので、瑚太朗は諸々の片付けをして、ベッドに入った。

どうにも眠れなかった。

朱音が話したプランが、脳裏にこびりついている。

小鳥が同じ事を考えてはいた、ということも。

朱音のプランは、この≪村≫全体を、巨大な魔物で覆ってしまうということだった。

クラゲかバルーンか、ともあれそのような透明な薄膜で覆い、寒さを凌ぐという手段だ。

冬の間はそれで雪も寒気も凌ぐ。

本当に恐ろしい冬が来るならば、雪は人の命を奪う。

去年は初雪を喜んだりもしたのだが、そんな呑気なことを言っていられる状況ではないかも知れない。

だが、魔物である以上、その膜は魔物使いの命を吸う。

この世界では、高度な技術は命と引き換えなのだ。

そのことを、瑚太朗は――自分が魔物使いでないから、より一層――考えないわけには行かなかった。

そんな事を考えていると、ふと、小鳥の気配がした。

「小鳥」

呼びかけると、小鳥は瑚太朗のベッドにそっと腰掛けた。

横になったまま、瑚太朗は小鳥の言葉を待った。

「……ごめんね、心配かけて」

「謝る事じゃないさ。生きていくためには、色々考えなきゃならない」

「ありがと」

少しほっとしたような声だった。

「怒られるんじゃないかと思って。なかなか言い出せなかったんだ」

「そうか？」

「そうだよ」

「まあそれは……」瑚太朗は少しだけ考えた。「どんなつもりかは、声に出る。もし、よくないことを考えていたら怒るけど、小鳥はそうじゃないだろ」

「……」

沈黙は、肯定だろうか。

「なあ、小鳥」

「うん」

「俺たちは、ずっと小鳥に助けられてきた。ログハウスから始まって、畑だって、炭だって。全部小鳥に教わった事だ」

「ただの知識だよ」

「それでも、それがなけりゃ、俺たちはやってこられなかった。だから、みんな感謝してる」

「それを言うなら、あたしだって……瑚太朗君がいなかったら、」

小鳥は言葉に詰まった。

「……ここまで、やってこられてないよ」

「それなら嬉しいんだけどな」

でも多分、本当にそうなんだろう。
そのことを瑚太朗は知っていた。
「それに……俺は、小鳥にいてもらわなきゃ困る」
「……」
「……だから、自分でやる、なんて言わないでくれよな」
口にすべきか迷ったその言葉を、瑚太朗は口にした。
一年前なら、とても言うべきではないと判断していたかも知れない。
でも、今ならその言葉が届くような気がしたのだ。
答えはない。
が、悪い沈黙ではない気がした。
「……ごめんね、答えられなくて」
「いいんだ。簡単に出せるものでもないし……小鳥さんも、あんまり遅くなんないうちに寝なさいよ」
「そうだね、あんがと」
瑚太朗が茶化すと、小鳥も言葉を返す。

今はそれで十分だと、瑚太朗は思った。

@　　@　　@

「――たとえば私なら、私がやります、とは言えないよ」
小鳥の問いに、アカリは、静かに優しく、言った。
≪村≫を見下ろす丘の上である。
「人間だからな、そんなものさ。自分の命を差し出すなんて、怖くてできない。恐ろしいじゃないか。それが普通だ」
「此花さんでも、そうなんだね」
「そりゃそうだ。神戸さんは一体、私の事をなんだと思っているんだ？」
呵々大笑して、アカリはそう言った。
「私は私にできることをしたいが、正義の味方でもないし、誰かのために犠牲になりたいわけじゃない。そんなことは、つまらないからな」
「つまらない、か……」

「そう。せっかく生きているんだ。楽しく生きたい。私はこの一年で、そう思うようになった。……意外か？」
少し、間があった。
「此花ルチアさんなら、違う事を言ってたかも」
「あいつは、以前の神戸さんに似ていたからな」
アカリは、ルチアの記憶を参照したのだろう。そんなことを言った。
「それに、今、神戸さんがいなくなってしまったら、皆困ってしまう。そうだろう？」
「……うん」
事実として、それはそうだ。
小鳥の知識は、≪村≫を支える重要な柱のひとつだった。
「そんな人を、生きるための人柱にするなんて、本末転倒だ。みんな止めるだろう」
「そっか……」
「念のため言っておくが」
アカリは、少し強めに言った。

「それは罰じゃない。ましてや罪なんかじゃない。それは単純に、希望とか未来とか、そう呼ばれるものだ」

その言葉に、小鳥は、胸が詰まる気がした。

希望、未来。

この世界の終りにあって、そんな言葉を聞くのは、ひどく不思議な気分だった。

だが……小鳥はその言葉に、ひどく心を動かされている自分に気づいた。

それを見たか、アカリは、にっこりと笑った。

「……神戸さん、ゆっくり考えよう。大丈夫だ。私たちは一人じゃない。みんなで考えよう。こういうのは、皆で背負っていくものなんだから」

@　　@　　@

「要するに、覚悟がつかないなら、やめておきなさい、ということ」

朱音の言葉は辛辣だが、その口調は、呆れの中に真摯さがある……と小鳥は思った。

「命に替えても……とか、自分より大切なものがあるとか、そういうことはまあ、あるわよ。世の中には色々な人間がいる。でも神戸、お前は今、そうじゃないんじゃないのかしら？」

「……そうですね。本当に」

小鳥は、苦笑いした。

「私はこんな状態だから、人に≪聞いた≫話ばかりだけどね。例えば、親が子供に対しては、そんなことを思う事もあるみたいだわよ。でも、男女関係でそうなるのは、はっきり言って勘違いの事が多い」

「男女関係は別にして」

『ふしだらＮＧ』？　まあそれはいいわ。とにかく、人が命を賭けるなんて、ほとんどないことなのよ。そう言っている連中の９９．９９パーセントは、ただの自暴自棄」

じろり、と朱音は小鳥を見た。

「しばらく前なら、お前もそう言ったかも知れないわね、神戸。でも、今はそうじゃないでしょう」

「はい」

明瞭な答えだった。

満足げに、朱音は頷いた。

「なら、立候補なんてしなくていいのよ。いえ、する権利がないと言うべきかしらね」

「厳しいですね、朱音さんは」

『聖女』にして『魔女』なのよ、私は。そこらの人間と一緒にしてもらっては困るわ」

そのアカリと対照的な言い方に、小鳥は思わず笑った。

「何かしら？」

「いえ……でも、ありがとうございます。少し考えが纏まりました」

「それならよかった。もう一つ……この件で、色々考えてくれているのが、何人かいるみたいね。相談に来るかも知れないから、その時はよろしく頼むわね」

「はい」

それは有り難い事だと思う。

朱音さんがサポートしてくれるなら、百人力だと思った。

@　　@　　@

その『何人か』が、小鳥と瑚太朗、そして朱音の元を訪ねてきた夜。
朱音は早々に帰ってしまい、瑚太朗と小鳥は、暖炉の火に当たりながら、考えにふけっていた。
主に、年嵩の魔物使い達だった。
そのなかにいたシマ老人は、最後に言った。
『実は、魔物使いが平等に命を使うとか、そうでない村人からも命を平等に……吸うだとか、そんな案も出たのです』
瑚太朗はその口調を思い出し、言い表しようのない重みを感じた。
『ですが、それは平等といいながら、老いも若きも、健康な人間も病気の人間も……人は皆同じではない。それぞれの事情は分からない。それが火種にもなる』
『だから……あなたたちが……』
瑚太朗の言葉に、シマ老人は頷いた。
『命は受け継がれるものです。命とは、最初からそういうものだと、そういうものなのだろうと、私たちは思ったのです』

そうなるのではないか、と瑚太朗は最初から思っていた。
だが、それは言葉を換えれば『姥捨山』だ。それは、ひどいことだった。
簡単に頷く事は出来なかった。
それを知っているのだろう。シマ老人はすぐに答えを求めなかった。
考えておいて欲しい、と言い残して、彼らは去って行った。

「ねえ、こたさんや」
「なんだい小鳥さんや」
「……どうすればいいんだろうね」
「そうだなあ……」
瑚太朗は、天井を見上げた。
それから、すっと真面目な顔になると、小鳥の顔に視線を合わせた。
小鳥が少し驚いたような表情をする。
「なあ、小鳥。俺がこれからするのは、ひどい話だ。だけど、嫌わないで欲しい」
「……うん」

「俺は、シマさんが持ってきてくれた案なら、どれでもいいと思ってる」
「どれでもいい？」
それは小鳥にとって、意外な言葉だった。
瑚太朗には、なにか考えがあるのだろうと思っていたからだ。
「もちろん、いい点悪い点はある。でも、ベストな案はない。だから、どこかのマイナスは受け容れなきゃならない。でも、どの案でも、俺が一番重要だと思う点は、担保されているんだ」
「重要だと思う点？」
「ああ」
瑚太朗は、静かに――僅かに悲しそうな顔だろうか？――笑った。
「それはな、小鳥、お前一人が犠牲にならないって点だ」
小鳥は、目を見開いた。
「ごめんな。でも、俺にとっては、それだけが一番重要で、それ以外は、二の次だ。もちろんみんなのために、勉強もするし考えるけど……」
手にした政治学の教科書を、瑚太朗はひらひらと振った。

「……結局俺はエゴイストなんだろうな。他の誰かを犠牲にしても、俺は小鳥に生きていて欲しい。俺は……小鳥は嫌かも知れないけど、それで
、」
瑚太朗の言葉が、止まった。そして、ゆっくりと、最後の言葉を紡いだ。
「それでひどい目に遭わせたけど、それでも……俺は小鳥に生きていて欲しい」
おそらく、≪破滅≫のことを言っているのだ。
小鳥には分かった。
あのとき瑚太朗がなにもしなければ、単純に世界は滅んでいた。
いっそその方が、小鳥は楽だったかも知れない。
だけど、それを、瑚太朗は、自分のエゴで……小鳥に生きていて欲しいと願ったのだ。
自分の顔が、くしゃりとなるのが、小鳥には分かった。
そして、言葉を絞り出した。
「それは……あたしには、とても言えないなあ……」
そして、小鳥はその自分の言葉に、きゅっと目を見開いた。
自分なら絶対に言えない事を、瑚太朗君は私に言ってくれたのだ。

それは、なんという……

「うう……」

突然、小鳥はぽろぽろと涙をこぼした。

「こ、小鳥！？」

瑚太朗が狼狽えた。何かまずい事を言っただろうか。

「大丈夫」

「でも……」

「大丈夫だから……」

小鳥はぼろぼろと、泣き続けた。

これは、嬉し涙なのか……小鳥はそう思った。

それは分からない。

だけど、ひとつだけ分かる事がある。

この涙はきっと、あのときから――死にかけている瑚太朗を≪助けた≫ときから――引きずり続けた涙だったのだ。

@　　@　　@

冬が来る前に、≪繭≫は完成した。
小鳥を始め、魔物使いたちが寝る間を惜しんだ成果でもあるが、しかし、それも、この魔物を使うことを決めてくれた人々がいるからこそのものだ。
その人々が、高台の丘に集まっていた。
やがて老人が魔物と接続すると、空中に折りたたまれていた半透明の膜の集合体は、ばたばたと折り紙を広げるように広がっていき、いくらもたたないうちに、しっかりと街を覆った。
「見事なものだな」
アカリが言うと、朱音が
「当然よ。私が手伝っているのだから」
「皆の力だな」
「ま、そういうことにしておくわ」
朱音が肩をすくめた。

式典が終わり、解散となっても、瑚太朗と小鳥は、丘の上で≪繭≫を見上げていた。
「ありがとうな、小鳥」
「いいんだよ」
小鳥はにっこりと笑った。
「みんなで決めた事だし、やっぱり、この≪村≫の人たちは優しいねえ」
「世界の終りにも、いいことはあるか」
「ま、そうかもねえ……」
小鳥があまりにも自然に答えたので、瑚太朗はかえって驚いた。
そんな言葉が出てくるなんて、思いもしなかったのだ。
「ま、油断してると、いつのまにか、あたしたちの番になったりして」
「それが先である事を祈るな」
「ま、まだまだ若いからね、あたしも、瑚太朗君も。それに……」
冗談っぽく言って、それから小鳥は、ふと付け加えた。

「いずれ私たちがその役を担うにしても、今はここで瑚太朗君と生きていたいよ……なんつって」

にへら、と笑って、小鳥は瑚太朗のほうを見て……そして、

「え、こ、瑚太朗君！？」

瑚太朗が、ぼろぼろと涙をこぼしていたのだ。

「ちょっと、あんさん、どうしたのさ！？」

「何でも……なんでもない……」

そんなはずはない、と思ったが、その理由が小鳥には分からなかった。

だが、悪い涙ではない、ということは分かった。

小鳥は、少しだけ迷った。

でも、その迷いは、本当に少しだけだった。

だから小鳥は――顔を上げた。

そして、おずおずと、ゆっくりと……その手を、瑚太朗の背中に伸ばした。

Love is (not) destructive.

吉野が静流とちはやを連れて戻ってきた。

それを聞いたとき、もちろん瑚太朗はその意味がまるで理解できなかったし、朱音が言葉を繰り返して、ようやく意味を理解しても、反応に困った瑚太朗の口から出た言葉は、

「さすがにそれは、笑えなさすぎますよ」

「たわけ！　こんなこと、誰が冗談で言える？」

一刀に切り捨てられた。口調がマジだった。

「……まさか」

「知らないわよ、でも、事実なんだから仕方がないわ」

「どこにっ」

「広場の……ぎゃっ！？」

言うか言わないかのうちに、瑚太朗は朱音（しまこだが）の襟首を引っ掴む。そして一目散に家の外に飛び出した。

@　@　@

「マッハナックル・コンマゼロがなければ即死だった……」
吉野が何を言っているのか、瑚太朗には全く分からなかったが、とにかく、吉野も静流もちはやも、生きていた。
静流とちはやは小鳥たちに連れられてとにかく水浴びに行ってしまった。
元気なのか、と声をかけようとした瑚太朗は、小鳥のギャルぱんちに吹っ飛ばされ、そして吉野と二人、地面に転がって空を見上げている。
真っ青に晴れた空だった。高い太陽が、《膜》にわずかに揺らめいて見える。

あのひどく赤い夕焼けの日、ガーディアン北米教区が巨大な植物怪獣と化した咲夜を滅ぼすために熱核兵器を使い、風祭が一瞬で蒸発したその瞬間、その真っ正面にいた静流とちはやを救ったのが、この吉野晴彦という男だったのだ。
「マッハナックル・コンマゼロか……」
「ああ。だが……それに、鳳が持っていた、あいつの包帯だな」
「咲夜の？」

「ああ。さしもの俺も、あの一瞬じゃ塹壕を掘るので精一杯だ。熱や放射線から守ってくれたのは、俺じゃない、あいつだ」
いかにも悔しそうに、吉野は言った。
こいつからしてみれば、結局、勝ち逃げされたのだ。許せるタチではないだろう。
「けどまあ……」
「……」
「お前のマッハナックル・コンマゼロだって、凄いよ」
「心にもねえ事を言うと殺すぞ」
「ほんとうだ。俺は……静流とちはやはもう……」
言葉が途切れた。
二人を遠巻きにしていた人たちも、そっと去っていったのだ。
ただ、遠くから風が吹いてきて、草がざわざわと揺れた。
「……ありがとう、吉野」
「うるせえ」
でも、伝えるべきことを伝えたのだ。

もう、そんなことはできないと思っていたのに。

@　　@　　@

村には一応、病院に相当する建物があって、ちはやと静流はそこに寝かされていた。
もちろん、現代医療の医者がいるわけではない。医者役はドルイドの小鳥だ。
部屋はもちろんログハウスだったが、小鳥のひととなりを示すように清潔で、水栽培のできる小さな植物の緑が部屋を小さく彩っていた。
その入口で、アカリは呆然と立ち尽くしていた。

アカリが村に戻ってきたのは、夕方になろうかという頃だった。
アカリの記憶素子には、ルチアの記憶もまた深く刻み込まれている。
そして、ルチアの戦友であった静流と――思い人であったちはやが同時に帰ってきたのだ。
あまりのことに、さすがのアカリの理解を超えていたのだ。

と、どうやら起きていた静流が、アカリのほうを見やって、小さく微笑んだ。
「アカリ――ただいま」
言うと、アカリの目から、涙があふれ出た。

@　　@　　@

静流は比較的元気だったが、それでもとにかく今日は横になっておくべきだ、という小鳥の指示で、大人しくしていた。
その隣のベッドのちはやが目覚めたのは、その日の深夜だった。
まずちはやの目に入ったのは、天井だった。
キャンプ場の宿泊施設みたいな、木の梁がむき出しの斜めの天井だ。
（知らない天井……）
だが、どうやらここは人間がいる場所らしい。自分がベッドに横になっていることにも、ちはやは気づいた。

（ここは、どこだろう）

そう思って横に目をやって、

「……！」

息を呑んだ。そこに、ルチアの顔があった。

――いや、そうではない。

ルチアは世界樹の頂上で朱音さんと相打ちになったという。

このひとは――小鳥が言っていた――此花アカリだ。ルチアの記憶を持つという、ルチアの……同型生体兵器だった。

そのような……存在がこの村にいるというのを聞いて、ちはやは内心穏やかではなかった。それがどういうことを意味するのか、ちはやには想像がつかなかった。

だが、こうしてちはやの眠るベッドの横にいる――外は暗い、おそらくは、ずっと横にいてくれたのだろう――アカリを見ていると、ちはやは、ああ、この子はルチアと同じなんだ、と素直に思うことができた。

魔物の技術がある以上、人間の同一性なんて、ちはやはもう、信じていない。いや――信じるしかないのだ。ちはやはそう思っている。

人は生きていれば、変わる――たぶん、おそらく。
だから、ちはやは、小鳥の言葉を信じることにした。アカリという子が、ルチアの記憶を持っているという、その言葉を。

@　　@　　@

「コタロー。私たちは結婚することにした」
「は？」
「何だてめえ、なんか文句あんのか？　ああ？」
「そうだ。コタローはなんか文句あんのか」
静流が吉野の言葉を復唱するので、瑚太朗はもう絶句した。
その隣で小鳥が目を丸くして、さらにその隣では、瑚太朗と小鳥の様子を見て、（しまこの中にいる）朱音が、やれやれと肩をすくめた（気配がした）。

先に我に返ったのは、小鳥だった。

「……ええと、お静さんや」
「うん」
「結婚って……その、いわゆる夫婦（めおと）になるっていう、その結婚？」
「もちろんそうだ」
「吉野君も異議なし？」
「当然だ」
「左様か……各々方、此度の趣旨は理解申した」
明らかに理解が追いついていない口調で、小鳥は言う。
静流とちはやが村に……戻ってきてから、それは、半年ばかりが経った頃のことだ。
「で？　村の行政の長たる村長は、これをどう処理するのかしら？」
朱音が問う。もちろん瑚太朗に向かってだ。

この村は、導き手たるドルイドの小鳥、権謀術数に長けるアドバイザーの朱音、そして、経緯からなしくずし的にその役目を負っている村長の瑚太朗の三人でほとんど運営されている。

将来的には選挙制度みたいなものが必要だろうと瑚太朗は考えているけれど、ここしばらくは自分が負って立つしかないだろうとも思っている。

が、静流の結婚となると話は別だ。しかも吉野となれば――いや、吉野は本当にいい奴なんだが――それを言われてどーすりゃいいんだ、というのが実感だった。

いや――そもそも、結婚などという話を、瑚太朗はどうしたらいいのか、まるでわからない。この村ができて以来、そんなことを言い出す人は、静流と吉野がはじめてだったのだ。

@　　@　　@

「まあでも、なんとなくそんな気はしてたよ、小鳥さんは」

「そうなのか？」
「瑚太朗君は鈍いねえ」
小鳥は、やれやれと肩をすくめた。
「いつから」
「三人が村に来たときから」
「マジか」
「マジマジ」
瑚太朗は全然そんな気配を感じていなかった。
まあ、それだけの余裕がまるでなかった、というのもあるだろう……と自分では思うけれど、それは言い訳かも知れない。
「多分、色々あったんだよ。村に来るまでにさ」
「あの二人、全然接点なかった気がするけど……そんなもんか」
「そんなもんだよ、きっと」
小鳥の声が、なんだか嬉しそうに聞こえて、まあそれならいいか、と瑚太朗は思いなおす。

と、

「情緒はそれでいいとして、色々考えることがあるのではなくて？」

朱音が言った。

結婚なるものは幸せなのだろうが、色々考えることが現実にはたくさんある。

そのルールを決めなければならないとなれば、なおさらだった。

日本国憲法によると、結婚というのは両性の自由意志によって行われる契約であるらしい。

戸籍の変更が行われ、それによって法的な効果が発生する。

もちろん、行政官が婚姻届に異議を申し立てるようなことは、ない。

なので、行政官たる瑚太朗がすべきなのは、戸籍制度の構築と婚姻届の様式の準備だと、朱音は言った。

「いやいや、戸籍制度って言われても、さすがに何も知らないですよ俺は」

「基本的なところは、日本の法律の流用でいいのではなくて？　他のルールも原則そうでしょうに」

「じゃあそれで」
思考力が復活していない瑚太朗は、朱音の提案をそのまま受け容れた。
まあ、こういうときの朱音さんが間違っていることはなかった。
が――小鳥がふと、顔を暗くした。
「朱音さん……その、アカリとちーちゃんのことは」
「さすがね、それを言おうとしていたのよ」
朱音は（しまこの顔で）にやりと笑った。
「日本のルールでは、同性婚は認められていなかった。天王寺、これくらいは知っているわね？」
「ええ、一応は……裁判とかのニュースは聞いたことがあります」
「そう。あの国は」朱音は、かつて存在した国のことを思い出すような顔をした。「そういう意味では、時代遅れもいいところだったのだから、私たちがそれを引き継ぐ必要はないわね」
「そうですね」
小鳥が珍しく真顔で言った。

「そもそも――アカリは生物学的には人間じゃないわけですし、その……」
「魔物とのハイブリッドのことを言っているのかしら？」
「……はい。遠からず、その可能性もある……そのときには、性別という考え方自体が変わってしまうかも知れない」
「そうね。だったら、シンプルに、二つの意思が合意だけを要件にしたらどうかしら」
「意思？　少し抽象的な気がしますけど」
「考えてもみなさい、小鳥。しまこが誰かと結婚したいと言い出したら、私は反対できるかしら？」
　小鳥はすぐに、朱音の言っていることを理解したらしかった。
「物理的なものではなくて、意思が問題……ということですか？」
「精神医学的には判断が難しいところもあるけれどね。でも、魔物使いの技術なら」
「それもあり得るかも知れない」
「そういうこと……天王寺、理解したかしら？」
「え？　あ、はい」
　突然話を振られて、瑚太朗は反射的に答えた。

「コタさん、本当に理解してる？」
「あああ……」瑚太朗は頷いた。「一応話にはついていってるつもりだ。いいんじゃないか、決まりとしては、それで」
本当かな、という疑惑の視線に、瑚太朗は苦笑いした。
そして、ふとなにか、遠いものを見るような目つきをした。
「しかし、あれだな」
「なにさ」
「それを考えたら、静流と吉野は……全然普通だな」
それを聞いて、小鳥は笑った。
「普通って言うのはどうかと思うけど、統計的にはよくあるケースだね。それに、なんだか楽しみ」
「楽しみって、何が」
「しずちゃんと吉野君の結婚式。せっかくだから、みんなでお祝いしてあげたい。そうじゃない？」

@　　@　　@

静流と吉野の結婚式は、盛大に行われた。
村で初めての出来事だ。
誰もが祝福をする。
考えてみれば、そんな出来事は、他にめったにない。
なるほど、これは特別なイベントなのかもしれない、と瑚太朗は思う。

ちはやとアカリは静流と吉野に続いて、入籍だけは済ませてしまっていた。
「コモン・ローの意味でも、良い実例ね、これは」
朱音はそう言った。どうやら英国の法体系らしいが、瑚太朗はそのあたりはよく知らない。
結婚式を挙げるつもりはあるらしかったが、二人はどうやら急ぐつもりはないらしかった。
次の年のいい季節に……と、アカリは言った。

親友の静流の式を、まず祝ってから、ということなのだろう。
あるいは、儀式がなくても、ちはやとアカリは、別に構わないのかも知れない。
急ぎはしないが、式は挙げたい……ということが、瑚太朗には、なんだか不思議に思われた。

@　@　@

静流と吉野の式から、一週間ほどが経った夜のことだった。

@　@　@

「なあ、小鳥」
「なにさ」
ベッドに横になったまま、瑚太朗が声をかけて、小鳥が答えた。
「結婚って何なんだろうな」

「んー……そうさねえ……」

それは、静流と吉野が二人（と朱音としまこ）のもとを訪ねてきた日から、ずっと脳裏にあったことだった。

瑚太朗も、それから小鳥も。

もちろん、決まり事としての意味は、二人ともよく分かっている。

なにしろ、日本のルールを元にしたとしても、それを決めたのは小鳥と瑚太朗の二人なのだ。

――ふたつの意思による、法的な効果を伴う契約。

戸籍とか相続とか、あるいは親権とか。

そういうことは理解しているが、ちはやとアカリは、おそらくは、そんなことを気にもせずに婚姻届を出しにきただろう。

そもそも、この小さな村で、全員が顔見知りのこの小さな世界で、婚姻届など出す意味がどこまであるだろうか。

そこが瑚太朗には、うまく噛み砕けていない。

一週間前の幸せな光景が、婚姻届という紙切れと、うまく結びつかないのだ。

「……わかんない。やっぱり分からないよ、私にも」
「小鳥もか」
「観測する限りは、たぶん……」
「たぶん、何だよ」
「お互いの独占と、他者の排除」
「なんかストロングスタイルな表現だな」
「ルールとしては、根底はそれなんだと思う。あたしの理解はそう。でも……」
小鳥はそこで一息ついた。
「……なんだか、幸せそうだったねえ」
「そうだな」
端的に瑚太朗は同意した。それはその通りだと思う。
お互いの独占と、他者の排除が、幸せなのだろうか。
それは、随分と閉じた世界のようだ。
それを外の人間が祝福している光景は、考えてみれば随分と不思議だ。
そこまで考えて、瑚太朗は、

「ああ……」
「どしたのさ、コタさん」
「だから、いいなって思うのかも知れない」
「？　どういうことさね」
「ああ、だから……」瑚太朗は、もやもやとした感覚の言語化を試みた。「だからつまり、閉じた世界であっても、幸せなものがあって、そういうものが集まれば、全体としては幸せなのかも知れない」
少しだけ考えて、小鳥が「ん……」と応えた。肯定的だと瑚太朗は思った。
「それで全部がうまくいくはずはないけど、でも、瑚太朗君の言うことは分かるよ」
「なあ、小鳥」
「なにさ」
「上手いこと言えないんだけどさ」
「うん」
「俺たちも、結婚する？」
「やっぱりそうなるよねえ……」

小鳥はため息をついたようだった。
「そうなるよなあ……」
静流と吉野、そしてアカリとちはやを見ていれば、なんというか……それが自然のような気もしてくる。
なにしろここに来てから――最初はこの村は、瑚太朗と小鳥の二人だけだったのだ――二人はずっと一緒に暮らしてきた。
色々なことがあった。
いいことも、難しいことも。
でも、それを二人で乗り越えてきた。
考えてみれば、もう、結婚、というポイントを、とうに二人は通り過ぎてきてしまっている。
それを瑚太朗も、小鳥も、ようやく実感せざるを得なかったのだ。
「これが、いい機会かも知れないね」
「そうだよな。これを逃すと、ずっとこのままの気がする」
「あたしはウェディングドレス、着てみたいかもだ」

「そしたらまあ、結婚するか」
「そうだねえ。そうしようかねえ」
どちらともなく、笑った。
「瑚太朗君、これはプロポーズなのかね？」
「まあ、形式上はそうなるな……雰囲気ないことこの上ないけど」
「でも、あたしたちらしいかもね」
「まったくだ」
そうしていると、瑚太朗はなんだか不思議な気分になった。
生きているうちに、小鳥とこんなことになるなんて、思いもしなかった。
「結婚、か」
言葉にしてみると、その言葉に対する実感は、やはりない。
だが、小鳥が隣にいる実感は、確かにあった。
「結婚、ね」
小鳥が瑚太朗の言葉を繰り返した。
「なんだよそれ」

「わかんない」
「わかんないよなあ」
それからまた二人は笑った。
確かにわからない。
もしかしたら、何も変わらないかも知れない。その可能性は高そうだ。
だけど、まあ――いいか、と瑚太朗は思った。
なぜならば……恐らくこれは、自分がかつて望んでいたものなのだろうから。
それが今、自分の――自分たちの手の中にある。
気づかないうちに、いつのまにか手に入れていたのならば、それにありふれた名前をつけるのは、きっと善い祝福なのだろう。
そんなことを、瑚太朗は思った。
そしてきっと、同じ事を小鳥も思っているだろうと、そんな気が瑚太朗にはしたのだ。

はなたばを、君に

「とはいえ、遠くないんだろ、新しい家は」
果てなく広がる青空のした、見渡すかぎりの黄金の小麦の海のあいだの小道であった。
ふたり肩を並べて歩いているのは吉野と瑚太朗で、吉野が隣を歩く瑚太朗に問いかけたのだ。
「ああ、歩いても半日はかからないよ……吉野もいちど来ればいいのにさ」
「冗談じゃねえ。てめえと神戸の愛の巣なんて、考えただけで胸焼けがするぜ」
吉野は瑚太朗と小鳥の新居のことをそう呼ぶが、そう呼ぶから胸焼けがするんだけどなあ、と瑚太朗は思う。
今は《役所》と呼ばれている建物だって、もともとは瑚太朗と小鳥の生活拠点というか家であり、吉野や朱音だって、日々の《村》の雑務を片付けにやってきているのだ……と瑚太朗が言うと、
「そうじゃなくなるから、愛の巣だって言ってんだ」
やれやれ、と吉野は肩をすくめてみせた。
「先が思いやられるぜ。もうフォローしてやれないんだから、うまくやれよな、天王寺」

そんなにフォローされた覚えもないけれど、うまくやっている、ということでは、吉野は確かに先達であるので、瑚太朗は苦笑いをする。

「……話を聞きに、たまに帰ってくるさ」

「ああ」

吉野は短く端的に返した。満足げである。

@　@　@

おそらくは、似たような会話を、神戸小鳥と千里朱音が交わしているだろう。

《村》の村長は天王寺瑚太朗から吉野晴彦に、ドルイドは神戸小鳥から千里朱音に。

人類が滅びてから、七年の月日が経ち、ようやく――《村》は世代交代の季節を迎えていた。

@　@　@

瑚太朗が《役所》に戻ると、最後の仕事が待ち構えていた。

引き継ぎの儀式である。

そもそも《村》自体がなし崩し的に始まった共同体だし、瑚太朗と小鳥のしてきたことも、実際のところ場当たり的である。瑚太朗も小鳥も、そもそもが行政も司法も立法も、学校の公民の授業で習った程度の知識しか持ち合わせていないのだ。

が、やってみれば、この《村》での分担は、振り返ってみればなかなかうまくできている。智恵者としてのドルイド、調整者としての村長。三権分立というわけにはいかないけれど、少人数の静かなコミュニティには、うまくはまっている。

なので、この機にそれを、ルールとして定めようというのである。

《村》の高札には、しばらく前から、吉野が村長を、朱音がドルイドをする、というのが掲示されているが、期日は追って……ということにしてあった。

いろいろの調整ごとを済ませて、それがようやく今日となったのだ。

用水路担当だの、市場担当だの、それなりに人数の増えてきた《役所》の名簿に、村長とドルイドが書き加えられ、そこに吉野と朱音の名が書き加えられた。それが、村長としての瑚太朗の最後の仕事だった。

「それじゃ――あとは頼んだ、吉野」

「ああ、任せておけ、天王寺」

実質的な引き継ぎは段階的に済ませてあるから、今日のふたりの言葉は、極めて簡素で端的で……ようするにただの儀式だった。

それでも儀式というのは必要なのが人間だ。

いままで、と、これから、を区切ることというのは、時間的に連続な存在である人間にとっては、意外と難しいのだ。

二人の横で、しまこの風貌をした朱音と小鳥が、同じような言葉を交わしている。

「朱音さん、本当にありがとうございます」

『何を言っているのよ。しまこを育てるのは、そもそもが私の役目なのを忘れたのかしら？』

うんうん、としまこも頷いている。

@　　@　　@

その夜の宴には、静流、アカリ、ちはやたちオカルト研究会のメンバーだけでなく、《村》でできた多くの知己が集まってくれた。

小鳥と瑚太朗の離任、朱音と吉野の着任の宴である。が、同時に小鳥と瑚太朗の、いましばらくの別れの宴であることを、誰もが知っている。

謹厳実直で知られる《村》の食料担当から、貴重な鶏を捌く許可が出たので――それは申請をした吉野にとっても、意外なことだったが――しまこが包丁を振るってくれた。この何年かのあいだに、しまこはすっかり料理ができるようになった。

「まあほんとに、神戸も天王寺もよくやったものだわ」

ぽつりと朱音が言った。
「なんですか、藪から棒に」
「向いてもいないことを七年間もやって、しかもそれなりに上手くいっている。なかなかできることではなくてよ」
向いてもいない――というのは、瑚太朗と小鳥、二人とものことだろう。
「……朱音さん、よく見てますね」
「うつけ。私を誰だと思っているのかしらね。吉野、お前もそう思うでしょう」
「当たり前ですよ、姉御。こいつらがチームのヘッド張れるタマかって」
今日の吉野はよく酔っている。饒舌である。
「でも、天王寺も神戸も、よくやったよ。お前らのおかげで、俺たちは何とか生きてこれた」
「吉野にそんな事を言われるとは思わなかった」
「言う機会もあんまりねえからな。でも、こんな日くらい、いいだろう」
「……やっぱり、分かるものかね」
「当たり前だ」

吉野は断言した。

「だけど、お前らがやらなきゃ、どうにもならなかった……姉御からそう聞いてるし、俺が見ててもそう思うしな。だから、みんな感謝してんだよ」

ストレートな言いように、瑚太朗はいっそ言葉に詰まった。

それを見た朱音が、にやにやと笑う。

「二人とも、素直に受け取っておきなさいな。頑張っていたのも知っているし、お前たちにはとても感謝しているのよ」

「うへへ、照れますなあ瑚太朗さんや」

小鳥が照れ隠しに混ぜっ返し、瑚太朗は

「……まったくなあ」

ようやくそれだけを言った。向いてないなりに、上手くやれたのだろうか。そればかりを考えていた。

だからこそ、やっぱり、ああ、瑚太朗は、自分たちが《村》を離れる決断をしたのは正しかったのだなあと思う。

自分にも、小鳥にも、少しばかりの休息と癒やしが、おそらくは必要なのだろう。

夜もいくらか更けてきた頃、瑚太朗と小鳥は宴を中座することにした。夜のうちに《村》を出るのである。夜が終わり朝になれば、新しい一日が始まる。新しい一日を始めるのは、新しい場所がいい。

オカルト研究会のメンバーが、《役所》の外まで見送りに出た。

いろいろと話したいことがある気もしたし、話すべきことはもう十分に話した気もした。ぽつぽつとした会話があり、そして名残惜しくもあったが、

「それじゃ、行くね」

小鳥がそう言うと、朱音がすっと、一歩下がった。

旅立ちの合図だった。

@　　@　　@

旅立ちと言っても、徒歩三十分の距離である。

その「家」は、小さな湖のほとりの、これもまた小さなログハウスであった。

見た目からして新築であるが、それもそのはず、一年前に見つけた場所に、半年前から二人で少しずつ木を伐り、少しずつ組み立てていたものだ。

ささやかなそれぞれの部屋に、寝室とキッチンを兼ねた居間。そしてもちろん、小鳥のための工房がある。

ありがたいことにおなかも満たされていたので、二人は簡単に水浴びをしてから、寝ることにした。寝ることにしたが、瑚太朗は、小鳥がすっかり寝入ってしまうのを待って、ベッドを抜け出した。

大したものでもないが、瑚太朗は、小鳥に渡したいものがあった。

それの準備をするために。

@　　@　　@

新しい朝が来た。希望の朝である。

希望の朝なので小鳥は歌を歌っている。

「あーったらしーいーあーさがきたー♪」

語尾に音符がつかんばかりの清々しい朝の歌である。

まあ……好きな女の歌声で目が覚めるというのは、たとえそれがラジオ体操の歌であっても悪い気分ではなかった。

目をこすりながら外に出ると、湖の畔で小鳥がラジオ体操をはじめていた。

「腕を振って身体をねじる運動〜♪」

「左、右、左、右」

瑚太朗が小鳥に唱和すると、おっ、という顔を一瞬小鳥はして、それから一段と張り切って、腕を振って身体をねじる運動をする。

ラジオ体操は第一、第二と続いて——瑚太朗はラジオ体操第二を覚えていなかったので、のびのびと身体を動かす小鳥を横目で見ながら、じたばたと苦闘した——それが終わると、小鳥はくるりと瑚太朗の方に向き直って、笑顔で口を開いた。

「おはよ、瑚太朗君」

一方の瑚太朗は、だいぶへとへとである。
「ああ……おはよ……」
「いい朝だねえ」
「ま、それはそうだな」
腰に手を当てて空を見上げると、秋の高い空である。
そう、秋――黄金の秋だった。
見渡せば、一面の木々が黄色に……金色に色づいていた。
「……ここ、イチョウの森だったんだな」
「そうだよ、知らなかったの？」
「綺麗だな」
「そうだねえ」
瑚太朗と小鳥は、なんとなく並んで、湖の向こうの黄金の森に目をやる。
「ま、コタさんや、少しゆっくりするとしましょうや」
小鳥があっけらかんと言った。
そう……少しゆっくりしてもいい。それくらいのことはしても、いいだろう。

そのために、二人はここにやってきたのだ。
「そうだ、ちょっと待っててくれ」
「？　あんさんどうしたのさ」
「まあまあ」
瑚太朗はログハウスに小走りに戻ると、すぐに小鳥の元に戻ってきた――その背中に、なにかを隠し持っている。
小鳥が、お、という顔をして、それから、知らん顔で居住まいを正した。
「どうしたの？」
「別に、全然大したものじゃないけど……」
瑚太朗はそう言って、背中から――取り出したのは、花束だった。
「わあ」
小鳥が目を見開いた。
コスモスである。
一方の瑚太朗はというと、妙に緊張をした顔だったが、
「まあそのなんだ……いままでありがとう、これからもよろしくな」

そういって、花束をそっと小鳥に差し出す。
小鳥は、おずおずとそれに手を伸ばす。
それを受け取って……小鳥のその顔を見て、瑚太朗はほっとした。
今までに見たことのないような、やわらかい――瑚太朗の思い込みでなければ、幸せそうな顔だった。
その柔らかな唇が動いて、
「ありがとう、瑚太朗くん」
そう言ってくれた。
のが聞こえて、瑚太朗は顔が熱くなった。
そして、瑚太朗の脳裏に――ほんの一瞬だけ、イメージが過る。
（――もし俺たちが、普通に出会って、普通に恋愛をして……そうしていたら――）
あるいは、チャペルで、親族友達を呼んで、結婚式を挙げて。
そうしたらきっと、小鳥は真っ白なドレスとベールをつけて。
そんな小鳥の綺麗な姿が、一瞬だけ脳裏を過ったのだ。

「どうしたのさ、コタさん」
「あ、ああ……」
小鳥の声で、瑚太朗が我に返る。
目の前に、小鳥がいた。
いつもの格好で、でも、俺が渡したコスモスの花束を持って。
いまさら言うべき事は多くない。
おれたちは十分に、時間を過ごしてきた。
だから瑚太朗は、
「受け取ってくれて嬉しいよ、小鳥」
そういって、そっと小鳥を抱きしめた。
ただ、それだけだった。
秋の風が、黄金の森から、爽やかに吹き渡ってきた。
その風は僅かに冷たく、冬の気配をそっと孕んでいた。
小鳥の体温を感じながら、瑚太朗は思う。
この冬も、次の冬も――俺たちはきっと、一緒に越えていくのだ、と。

everything you've ever dreamed

≪冬≫がやってきてなお、しかし季節の移ろいというのはある。
今は秋だ。
秋の夜はもう随分と厚着をしなければならないが、小鳥はふと、夜空を見上げたくなった。
瑚太朗を起こさないように、慎重に、小鳥はベッドを抜け出した。

夜空には月が輝いていた。
それは≪繭≫の薄い膜を通してだから、すこしだけぼやけて、ゆらいで見えた。
小さな星々を夜空から消し去ってしまうような、そんなくっきりとした月明かりの下――彼女が立っていた。
おもわず、小鳥はにっこりとした。
そして声をかける。
「おひさしぶり、篝」
まるで古い友人に会うかのような、軽やかで、心弾むような声だった。

@　　@　　@

二人は、庭のベンチに並んで腰掛けていた。
篝は小鳥たちの状況のことをよく知っているようだったが、篝に訊かれるまま、小鳥は自分たちのことを話した。
《村》のこと。《繭》のこと。瑚太朗のこと。そして、自分のことを。
ひととおりの近況報告が終わると、
「私は不思議です、小鳥」
篝は無表情のまま、抑揚もなく言った。
「不思議？」
「はい。星のアウロラが枯渇して、≪破滅≫のせいで≪森≫が世界を覆い、≪冬≫がやってきた。人類はもうほとんど残っていなくて、≪繭≫のなかで滅びに瀕している。それなのに――」
すっと篝が小鳥の方を向いた。

「どうして小鳥は、そんなに幸せそうなのですか。この世界はもう、終わっているというのに」

その問いを聞いて、小鳥は確信した。

世界が終わりつつある事は、篝にとっては、重大なことのはずだ。

それなのに、こうも――そうだ、これは――客観的なのは、その理由は。

「ねえ、篝」

「なんでしょう」

「あなたは、どこから来たの？」

篝は、眉をひそめた。

「本当に理解できません。そのことを理解してなお、小鳥、あなたは幸せそうだ」

「そうだね……」

小鳥は静かに目を閉じた。

「いつも、夢を見るんだ。昔の夢。まだ、篝に会う前の頃の夢……」

@　　@　　@

いつもあたしは、寂しそうな顔をしてた。
籌と出会う前なんだから、きっとそれは、私の本質的な性格なんだろうなって。
人と違うって思って、人と話をしないのに、寂しがり。
それはまあ……そりゃそうだよね、って今では思うけど。

@　@　@

「だけど，その夢を見るたびに、あたしは、あたしがどんな人間だったのか、よく分かる気がする。だから、今を大切にできる。つまり――」
「――夢も現実の一部だ、と」
理解が早い。小鳥は笑って頷いた。
「そう。だから、もしこの世界が誰かの夢だとしても……その『誰か』が」小鳥は、籌に向かって少し微笑んだ「この夢を覚えていてくれるなら、それは現実ってことなんだよ」
「――」

「話を戻すとね、篝。あたしは、今結構、幸せだよ。明日生きていくことだけ考えていられるし――それに、瑚太朗君と一緒にいられる」
「瑚太朗も――幸せなのでしょうか」
「うん。間違いない」
その言葉が自然に出てきて、小鳥はひどく納得した。
「だから篝、あなたが覚えていてくれると嬉しいな。瑚太朗君とあたしの幸せは、そう……あるんだっていうこと。そのかたちをさ」

@　　@　　@

「そろそろお別れの時間です」
篝はそう言うと、すっと立ち上がり、数歩歩くと、小鳥の方を振り返った。
ちょうど、月明かりにまっすぐに照らされて――いや、おそらく篝自身も月のようにわずかに輝いているのかも知れなかった。
「さよなら、篝。瑚太朗君によろしくね」

「はい」
嘘はなさそうな言葉だった。
それから小鳥は、訊いた。
「ねえ、この世界は、あとどれくらいなのかな」
「わかりません。アウロラが完全になくなれば、誰も気づかないうちに――苦痛はありません」
「まだ、しばらく大丈夫かな」
ふと、籌は考えるようなしぐさをした。それから、答えた。
「はい、きっと」
「……ありがと」
「それでは」
言葉と同時に、籌の姿が、すっと薄れはじめた。
薄れたまま、小鳥の目から遠ざかり、しかし――その姿はどんどん大きくなっているように見えた。

やがて、篝の黒いビロードのドレスが、赤いリボンが、夜空に溶けていき、小鳥はほとんどそれを見上げるようにしていた。

そして最後に、篝の大きな顔が、まるで――水槽の金魚をのぞき込むような思案の顔を残して、そのままふっと夜空に消えた。

It's a Beautiful World

瑚太朗が午睡から目覚めると、いつのまにか陽は沈み、しずかな虫の声が、リィン、リィン……と、とおくから聞こえてきていた。
ふたりのささやかなログハウスには、まだ小鳥の気配はない。
「やれやれ……迎えに行かなきゃだな」
呟いて、ベッドから抜け出す。

小鳥がどこにいるのか、知っていた。
瑚太朗は足取りも軽く森を行く。
思えば最初から、俺はこうだった。
マダムに頼まれて、森に小鳥を探しに行った日々を思い出す。
『小鳥が帰ってこないのです』
いつもマダムはそう言った。
それが魔物の機能としてなのか、思春期の娘を持つひとりの母親の気持ちなのかは、いまだに判らないままだ。
（世の中、わからないことだらけだ）

瑚太朗はそんなことを考えた。

ついこのあいだまで、日本のいち地方都市の学生だった気がする。小鳥との距離を詰めようとしては空振りする、そんなことばかり繰り返していた。

それが今や、超能力に目覚め、魔物と戦い、悪の組織と戦い、世界は終わり、その世界の終りでささやかな生活を守るために粉骨砕身し――そして隣には小鳥がいる。

何がどうなるかわからないものだと、瑚太朗は思う。

西の空を見上げると、まだ、ほんとうにわずかだが、青みがかっている空だ。陽が落ちて、そう長い時間は経っていないらしい。

《村》の《繭》のそとでは、夜空は綺麗に見える。

もちろんひどく寒いが――瑚太朗はコートの襟に首を埋めるようにした――だが、見上げれば星が、張り詰めた空気のむこうに、揺れもせず、瞬きもせず、静かに光を放っている。

この空は、かつて都市であった風祭でも、あるいは《繭》にくるまれた《村》でも、見えないものだ。

もちろん、多くの人たちは、あたたかい《村》のほうが幸せに生きていける。
だが、俺たちは――俺や小鳥はそうじゃない。
人になじめない、というのは実際あるとしても、それ以上に、この澄んだ空気のほうが、性に合っているのだ。

だから、いつも小鳥はそんな場所にいたのだと、今なら判る気がした。

静かな森を抜けた先に、その場所はあった。
その樹がいったい何なのか、瑚太朗は知らないし、小鳥もそれは判らないという。
だが、小鳥はその樹の根元で眠るのが落ちつくらしい。
瑚太朗も、それが判る気がした。
その樹に、なにかしらの親近感のようなものを覚えることすらある。
果たして小鳥は、その木の根元で眠っていた。
まるで眠れる森の姫だ、と瑚太朗は思う。

しっかりあたたかい格好をして、懐炉代わりの魔物を抱えていて、風邪は引かないだろう。

でも、その樹の根元で小鳥がひとりで眠っているのは、寂しいような気がした。

だから瑚太朗は、小鳥の隣にそっと座り込み、肩を寄せる。

いつかのように、小銭の音で小鳥を家に連れ帰る必要もない。

急ぐことはない。

いまの二人には、十分すぎるくらいの時間があるのだ。

瑚太朗は、

「おやすみ、小鳥」

呟いた。

そして……満たされたような顔のまま、そっと静かに目を閉じた。

（終）

あとがき

お世話になっております。鶏卵工房の瀧川新惟です。

少しずつ書きすすめていた、天王寺瑚太朗と神戸小鳥の個人的な物語ですが、今回でいったんの完結というかたちになります。二〇一六年から、今まで何度か同人誌や Web での掲載をしてきましたが、ここまで読んで頂いた皆様に感謝いたします。ありがとうございます。

冒頭の目次のとおり、「終末は巡る黄金の秋」「神戸小鳥の旅路」と併せて読んでいただけると時系列が追えるとは思うのですが、とはいえ「終末は～」はアポカリプスもののＳＦの側面、「神戸小鳥の～」は幼年期もののＳＦの側面が大きくて(たぶん)、瑚太朗と小鳥の内面的な物語はあまり描けていなかった自覚があるので、この本だけを追っても、少なくとも瑚太朗と小鳥の心情は一貫して追いかけられるのではないかなと思っています。

余談なのですが、どうも僕は、物語を完結させるのに時間がかかるたちらしく、棗恭介の話も、花菱デパート屋上プラネタリウム館の諸氏の話も、終わらせるのに五年もの時間がかかっています。今回の瑚太朗と小鳥の物語も、当初から足かけ七年弱がかかっていて、それ

だけ瑚太朗と小鳥の物語が僕にとって色々な意味で思い入れのあるものになりました。

まあなにしろ、ほとんどが捏造という感じなのですが、Rewrite で、そして瑚太朗と小鳥で真面目にセンチメンタルＳＦをやるぞ、というコンセプト自体は、うまいこと実現できたのではないかなあ、などと思っています。

さて、次のお話はというと、まったくの未定なのですが、なにかしらのお話を書いていきたいとは思っています。結局文章を書くの、好きですし。

そんなわけで、もしかしたら、お話をどこかで見かけていただく機会があればいいな……思っているのですが、その時にはどうぞ、またよろしくお願いいたします。

二〇二三年五月一四日

瀧川　新惟

鶏卵文庫

"Rewrite" epilogue (another)
one more kiss, one more love. / はなたばを、君に

2023 年 5 月 14 日 初版第一刷発行

■著者　瀧川新惟
■原作　Key/Visual Art's
■製作　サークル鶏卵工房

発行人：瀧川新惟
a.takigawa@lostwinter.info
発行元：サークル鶏卵工房
http://lostwinter.info/
印刷　：株式会社ポプルス
https://www.popls.co.jp/

本誌は”Rewrite”の二次創作です。